

創刊120周年

幼児の教育

2021~2022

冬

— since1901 —

子ども学の源流を次世代につなぐ

第一号

第二二卷



ある冬の日。

しゃがみ込めば、

そこだけほんのり暖かい。

写真

子どもの情景 1

目次 まど

歩く・探す・出会う・驚く・また歩く 2

特集

創刊120周年記念

『幼児の教育』120年。

未来に何をつなぐのか 4

散歩の意味をとらえ直そう

― 戸外の保育が学びをひらく 4

《座談会 2021》

久保健太・坂本喜一郎・野村真子・宮里暁美 5

実践

私の保育ノート

つながっていくそれぞれの「思い」

平野亜季 22

保育をつなぐ

～ お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信 ～

Vol.12

海外とのつながり

上坂元絵里 26

連載

「育ての心」で語りあう

～ 動画を囲んだDX時代のカンファレンス ～

Vol.4

子どものアンテナに大人が気づく

市川杏子・井口陽南子・能登比呂志
伊垣尚人・久保健太

32

視点

お散歩を通じてまちで育てる

「まち保育」の視座

三輪律江 38



特集

創刊120周年記念

『幼児の教育』120年。 未来に何をつなぐのか 4

1901(明治34)年、『幼児の教育』は『婦人と子ども』という誌名で産声を上げました。以来120年、本誌は変わりゆく日本の幼児教育・保育を見つめてきました。

この120年の間に、子どもも変わったのでしょうか。

あるいは、子どもは子ども、いつも変わらずにそこにいるのでしょうか。

今年、「120年の大人と子どもの関係」を本誌の歴史と共に振り返っていきます。

今回のテーマ：

散歩の意味をとらえ直そう — 戸外の保育が学びをひろく

15年ほど前から、子どもの「安全・安心」を守る機運が高まり、それ自体は良いことなのですが、子どもにとっては自由に過ごせる時間と空間が少なくなりました。さらには、昨年からのコロナ禍で「ステイホーム」が繰り返され、子どもたちも、なるべく家にいることを余儀なくさせられています。そんな今だからこそ、あらためて、戸外に出ていくことの意味について、しっかり考えておきたいと思います。

今回は、さまざまな現場で子どもと戸外に出かけている実践者の皆さんと「戸外」「散歩」「自然」をテーマに語りあいました。



座談会 2021

散歩の意味を とらえ直そう

久保健太
坂本喜一郎
野村直子
宮里暁美
(発言順)

それぞれの思い

久保 本日は、『幼児の教育』が120周年を迎えたことを記念する特集のひとつとして、戸外の保育、散歩、自然をテーマに、皆さんと語りあいたいと思っています。

喜一郎 初めまして。私は東京都世田谷区の岡本という所でRISSHO KID'Sきらり岡本という保育園の園長をしています、坂本喜一郎と言います。今日は初めての先生ばかりで、ワクワクしています。よろしくお願いします。

野村 宮里先生、お久しぶりです。皆さま、初めまして。new education LittleTreeの野村直子と申します。私は森のようちえん全国ネットワーク連盟の立ち上げ期から理事として携わってきた経緯もあり、子どもたちが自然の中で過ごしながら育つということにかかわってきました。小さな保育室での園長の経験もあり、今は、東京の亀戸と横浜市神奈川区にある「わくわくbase」という企業主導型保育室で顧問をさせていただいています。ほかに、保育園、幼稚園の先生方への研修をしたり、自然を取り入れた保育を推進するような活動をしています。よろしく申し上げます。

宮里 野村さんとは昨年、東京都版保育モデルの検討という仕事で一緒しました。自然とのかかわりが豊かになっていくように検討していったのですが、そこで野村さんが取り組まれていることがすてきだなと思って、今回一緒に語りたいたいとお誘いしました。

久保健太 (関東学院大学)
野村直子 (new education LittleTree)

坂本喜一郎 (RISSHO KID'S きらり)
宮里暁美 (お茶の水女子大学)



新しく喜一郎さんとも出会えて、この4人で語りあえることをうれしく思っています。なんか新しい感じがして良いなと思っています。

以前勤務していた東京の目黒区立ふどう幼稚園は、園庭のない幼稚園でした。でもすぐそばに都立林試の森公園があつて、そこを頻繁に利用したことで気がたぐさんありました。今はお茶大の中にある文京区立お茶の水女子大学ことも園にかかわっています、ここも園庭がほとんどなくて、キャンパスを園庭にして遊び尽くすという保育をしています。「ないけれど、ある」みたいな感じがする場所にいると、気づくことが多いなと思います。

久保 あらためまして、皆さん、こんにちは。私は関東学院大学というところで保育者を養成している者です。保育者養成の学校に着任したことがきっかけで保育の世界にもかわり始めましたが、もともとは街づくりの研究をしていました。その時は、野天の遊び場を

研究していて、園庭がなくても、出かけていくことで園庭以上の自然に出会うことができるのではないかとこのことを考えていました。喜一郎先生がそうした保育を実践されていたので、今日お話を伺えたらと思ってお声をかけさせていただきました。

自然と子ども

野村 私は10年ぐらい前から、幼稚園、保育園の先生方への研修を始めました。もともと私も保育士だったのですが、大人が設定したプログラムを提供して『遊ばせる』保育をしていると、子どもから「早く遊びたい」と言われるというジレンマを感じていました。

近所のただの原っぱに子どもを連れて行つたときに、ものの10分で自由に遊び始め、自ら遊びをつくり始めた姿を見たときの、その子どもの可能性への驚きが今の活動のきっかけになりました。今は、幼稚園や保育園の先

地域の資源を活用する

研修では写真（右）のようにネイチャーゲームを取り入れて、先生方に「自然って面白いな、楽しいな」と感じてもらう体験をまずはしてもらいたいと思います。以前は放課後のプログラムも行っていますが、3、4、5歳の子どもたちが幼稚園が終わってから集まって森の中で思いきり遊ぶ活動をしていました。

喜一郎 普段皆さんにお見せしている写真をお見せしますね。これ、クイズです。どこの



生方に子どもたちと一緒に自然体験を楽しんでもらいたいと思って活動しています。

海だかわかります？ 私が最も好きな海なんですよ。きれいなんですよ。透明感があって、生き物がたくさんいますし。

宮里 東京からそんなに遠くないですよね。

喜一郎 遠くないです。ここに写っているの、うちの園の子どもたちなんです。年長。

宮里 神奈川県？ 猿島？

喜一郎 惜しいです。

久保 猿島より近いんですか？

喜一郎 岡本の園ができる前は、神奈川県相模大野の RISSHO KIDS きらり（以下、きらり）という園で園長をしていました。

写真の海は江の島です。島の裏側の磯なんです。きらりは、





▲坂本喜一郎氏

「水遊び」も「江の島に行く」という感覚なんです。

きらりができたのが10年前です。園庭のない、駅から10分ほどのテナントの保育園だっ

たのですが、そこからスタートして良かったと思っています。

園庭がないと「かわいそう」と言われるし、園庭がないだけで、残念な保育をしているんじゃないか。テナントだから子どもを行かせたくない。という先入観が嫌で、どうやったら覆せるかを考えていたんです。

職員たちと一緒に、「テナントで園庭がなくてかわいそう」と言われるのであれば、テナントで園庭がなくても最高に魅力的な保育ができるということを立証しようと思ったのが、きらりの始まりなんです。

園庭の代わりに地域の資源を積極的に活用する。先ほど宮里先生が隣の公園を活用されたとおっしゃっていましたが、僕もそういったことを大切にしたいと思っていました。

久保 地域の資源というのはキーワードですね。

喜一郎 今は世田谷区の岡本という場所で新しい保育園をしています。そこでは夢だった広い園庭を造れたんです。でも園庭があるからといって、園外に出ていくことは全くやめていません。相模大野のきらりのときからの伝統で、地域を使うということが続けています。

自転車地域を動き回る

久保 保育の中で自転車に乗っていますね？

喜一郎 僕はサイクリングが好きなんです。子どもたちに「園長先生の夢はみんなとサイクリングに行くことなんだよね」と伝えていきます。(笑)



子どもたちが公園で自転車に乗るようになって、僕のテストに受かった人たちはサイクリングチームになれるんです。そのチームで、相模大野から江の島まで自転車で行くんです。32キロを6時間かけて、遊びながら行きます。呼びかけたわけではないのですが、親も来てくれます。15人の子どもと15人の親と、引率の先生7、8人なので、40人規模で走っている。

野村 自転車は園で用意しているんですか？

喜一郎 違うんです。園には三輪車と一緒に

自転車置いてあるんです。みんな最初は、三輪車に乗るんですが、そばに自転車がさりげなく置かれていて、それに慣れて、子どもが乗り始めるようになっていくんです。

乗れるようになったら、私のテストを受けられるのですが、そのテストに合格するとカードがもらえて、毎日登園するときに自分の自転車であってよいんです。自分の自転車で園に来て、その自転車が園に並ぶ。自慢大会が始まる。俺の自転車格好いいだろうみたいな、そういう世界なんです。

この自転車チームも地域資源の活用のひとつなのかなって。たまたま僕の夢から始まったことではあるのですが、今は子どもの夢、文化になっている感じがすかね。

久保 自転車の取り組みはいろいろと苦労もあつたのでは？

喜一郎 今でこそ当たり前の文化になっているので抵抗ないんですけども。相模大野で始めたときは、安全に配慮しました。街中なので危ないんですよ。安全な職員配置とか、引率できる子どもの人数とか。

海・川・山・サイクリングは、園外での気

を使うビッグ4ですね。なので、必ず園長である私が引率するという、そういう体制でやっています。職員も楽しんで子どもと一緒にやってくれるので、やりがいがあります。

地域の本物と出会う

喜一郎 ただサイクリングをやればいいというものでもないんです。サイクリングを通じて出会える地域の「本物」が素晴らしいんです。

例えば、相模大野ではインドの本物に出会いました。雨の日に、子どもが「雨の日じゃないと行かない場所に散歩に行きたい」と言って、行った先が駅ビルのレストラン街だったんですよ。レストラン街を歩いていたら、子どもたちがインド料理のディスプレイに目を留めて、お店の前でナンを見ながら、「何だこれ！ 何だこれ！」と大騒ぎしていたら、中からインド人の店員さんが出てきてくれた

んです（写真下）。

そこからインドカレーに興味をもち、インドカレーの研究を子どもがしていくんですけれども、最後はインドのことが好きになつて。インドのダンスを

覚え、インドの衣装を作るとか、ヒンドゥー語を話し始めるとか。

地域でさまざまな環境や人と出会うことによつて新しい学びの気付きが生まれたり、その積極的なかわりの中で、小学校でいうところの生活科・総合学習につながるような、遊びを通して学ぶということを、自然にやっていたんです。

そういう学びを大切にしたいという思いがあつて、園の中でできることはやるんだけれども、園の外だからこそできることも大切に



しようとして、室内でも園外でも大切にしてきたという経緯があります。

宮里 面白いですね！ インド料理屋さんの人たちとの出会いがいいなあ。

喜一郎 インド。僕が言うのもなんですが、面白いんです。

このディスプレイを見て大騒ぎをしていたら、予想もしないインド人の店員さんが出てきた。これがすべての出会いなんです。計画できない偶然が大切だなと。

セレンディピティ

宮里 「偶然」って好きな言葉なんです。保育って偶然の宝庫みたいだなと思うんです。ある時、5歳児クラスでバン格拉デシユに興味をもった子たちがいたんです。すごい数の人が伏せてお祈りしている写真を本の中で見つけて興味をもった。それがバン格拉デシユだったんです。その子たちがバン格拉デシユの

ことを調べていたら、そこにちょうど来ていた学生が驚いて「うちの両親は今バン格拉デシユの日本人学校にいます」と。それなら、というろいろ教えてもらったことがあります。これも偶然、でもそれだけではないような気がする。

インド料理屋の前で「何だ！ 何だ！」と言っていたらインド人の店員さんが出てきたように、運が良いだけというよりは、「何だ！」と声に出すという動きをするから出会えるという感じ。これを「セレンディピティ」、幸運な偶然に巡り合う能力、と呼ぶ。子どもや保育者がいろいろなものに関心をもって、扉を開くから、「面白いことが次から次に飛び込んでくるのかな」と思ったんです。

あらためて「戸外」の大事さ

久保 園外に出ていくときに大切にされていることはありますか？



▲野村直子氏

野村 今、宮里先生がおっしゃっていたセレンディピティって、私も大事と思っています。偶然性は室内環境よりも自然のほうが、園庭よりも園外の自然環境

のほうが、出会う確率が高いと思います。私が大事にしているというか、面白がっているのは、子どもたちの反応です。子どもが自然の中でどこを見ていて、何を発見している、どんな心の動きがあるのかを観察することが、私自身が好きだし、楽しい。

子どもが何かを感じる前にあまりに大人が「ほらほら、これこれ、触ってごらん」としないように、子ども自身の発見や気付きを大事にするようにしているかもしれないですね。
宮里 心に残っているエピソード、あの時、面白かったなというエピソードありますか？

野村 鎌倉の森の中で活動をされている方の所に見学に行ったときに、3歳児の低月齢の子が、森の中を2人で歩いていましたね。12月の落ち葉の時期で、湿地帯の上に落ち葉が降り積もってふかふかしていたんです。

子どもが2人で、「ここ、ふかふかするね」「ふかふかするね」「面白いね」「面白いね」って言いながら歩いていたら、私の後ろを歩いていた別の子がタタタタと走ってきて、「ここは下に水があるからふかふかするんだよ」と偉そうに言ったんですね。私、ケンカになるかなと思ったら、先の2人が「そうなんだ」と。

私から見ても、偉そうな子の強い言い方を吸収した感じがあったんです。そうしたら、偉そうだった子が「そうだよ」と優しい言い方になったんです。

子どもだけの世界ではそんなふうに優しさが表現されます。もしそこで大人が「○○君、



▲宮里暁美氏

そういう言い方しないの」と言っていたら、強い子が悪者になるけれど、子どもって自然の中でいろんなことを感じているから、ぶつかりあうのも柔らかくなるのかなと感じました。その姿が印象に残っています。

宮里 ふかふかな葉っぱのおかげで、気分までふかふかだったんでしょかね。

野村 自然の中になると、コミュニケーションが豊かになりますね。

宮里 目黒の幼稚園にいたとき、「入園当初の落ち着かない時期は行かないよね」「子どもが落ち着いたら外に行こう」と言っていたのを、「落ち着かないから行こう」みたいに逆転

させたことがあったんです。そうしたら、園内だとブロックの取り合いでどうしてもめ事になってしまいう子が、一面の落ち葉を見つけ

て大喜びで突進していったんです。その時の、その子のうれしそうな姿を覚えています。

園内の遊具はどうしても数が限られるので人が集中すると、あっちに行けって言いたくなるんだけど、自然物は惜しみなくあるものだから寛容な気分になれる。一面の落ち葉の山でみんなが楽しんでいるのを見て笑っていられる。当たり前過ぎるかもしれないけれど「受けとめる度量が広いな、自然は」と思ったのを思い出しました。

久保 自然を相手にすると、人間同士の取り合いじゃなくて、競い合いが始まりますよね。例えば、ドングリの数を競りあったり。

宮里 いっぱい集めたという気分には皆なれる。
久保 「このドングリでかいよ」「わあすげえ」って共有したり。

野村 そうそう。「どこにあったの？」って、また広がっていきます。

宮里 うれしい世界ですよ。

「散歩」をどう考える？

久保 散歩ってどう考えています？

喜一郎 僕は講演のときに、少し驚かせるように、「皆さんのイメージする散歩ってどんな散歩ですか？」当事者は散歩と思っていて、僕には散歩には思えない散歩があるんですけど聞いてくれますか？」って話なんです。

で、「よく子どもたちが2人ずつ手をつないで先頭と最後尾に先生がいて、同じリズムで歩くことだけを強いられている散歩みたいな。僕はそれを「移動の練習」と心の中で思っているんです。子どもが立ち止まると、後ろの人が迷惑だから間を空けないで歩きなさいと言っているのは散歩なのかな？」って。久保 それにドキッとする保育者の人もいるかもしれませんね。自分たちの散歩は移動の練習だったのかもしれないって。

喜一郎 僕の中での散歩の定義は、「寄り道を

する、立ち止まる」なんですよね。子どもたちがその子その子で興味があった瞬間に止まっちゃうんですか。あの瞬間が学びの始まりじゃないですか。安全管理も大切ですが、先生たちが学びの始まりを摘み取っているのではないのでしょうか。だから、この写真(右)のような姿こそ散歩の姿だと思っています。

もう一つ理解できないのは、「気分転換に行ってきます」っていう保育者の言葉。だから講演では、「とんでもない話ですよ。気分転換のために行くのは、あなたのためでしょ？子どもは気分転換なんて言葉は使わないし、そもそも子どもが散歩に行くことでイメージしているのは、いつもと違う所で思いっきり遊べるかと思っているんでしょう？ この



感覚の違いって恐ろしいですよね」と笑いながら言うんです。

久保 笑いながら。(笑)

喜一郎 はい。子どもが自分の興味・関心で立ち止まったり、寄り道できたりするのが散歩の醍醐味じゃないですか。寄り道から生まれる気付きとか学びのきっかけこそが、散歩の大きな意義だと思っています。

だから僕は、脱線チツクな、一見危なそうな、子どもの「何か面白いことがここにあるぞ」「何か楽しいことが始まりそうだ」という嗅覚が発揮される時間が散歩だと思っています。

宮里 完全に同感です。一歩歩けば何かが見つかるんです。だから、あの写真のような姿は私も大好きです。列で歩いている園のほうがいいけれど、立ち止まるほうを広げていけば、子どもはもっと幸せになるかもしれない。

地域の魅力を感じる

喜一郎 僕は、子どもたちのつぶやきを大切にしています。「もっと〇〇したいよね」とか「こんなことしたいよね」とかそういうつぶやきを楽しみながら、先生と子どもがパートナーになって、相模大野とか町田という地元を、地域を、散歩して楽しんでいたわけです。そうして子どもたちは無意識に地域の魅力を感じていると思うんです。僕はこれも大切な散歩の意義だと思っています。

散歩は気晴らしでも単に遊びでもないし、散歩を丁寧積み上げていくと地域の魅力に気づくんです。地域に生きることの素晴らしさを自然に感じていく魅力があつて。これやらないと、将来子どもが地域からいなくなると思っているんです。

久保 魅力を感じることや好きなことにつながるっていいですね。

喜一郎 本当にそうなんです。そこで知りあったばかりの子どもたち同士でもいざこざが起きない。それって気持ちが変わりあえるメンバーじゃないですか。そしてそこに融合しちゃった人たちだから平和以外の何ものでもありません。

野村 散歩中、子どもたちとザリガニ釣りに夢中になっていると、お母さんと2人で来ていたお子さんがやりたそうに入ってきて、「やってみる？」と渡すと一緒になって遊んだりということも。どっぷり一緒になって遊んだりとかありますよね。

宮里 園内じゃない良さってそれですよ。思いがけない出会い。しかも、好きなものにつながる出会い。

100年前の「家なき幼稚園」

久保 ちょうど100年前に、喜一郎さんと野村さんと同じことを考えている、大阪の橋詰

さんという人がいたことを紹介させていただきます。橋詰良一（雅号・せみ郎）さんという方が1922年の春に、大阪の池田市に「家なき幼稚園」という園をつくったんです。

その設立趣意書の一部を紹介しますね。

「家はなくても幼稚園はできます。生き生きとした保育の方法を考えて行きましたら、家に囚われた幼稚園よりも、家のない幼稚園の方が幼児にとっても幸せかもしれません。家のあるためにその家にはかり閉じ込められたり、箱庭のような運動場にばかり追い込まれて、めつたに野へ出ることも山へ行くこともできないような大阪あたりの幼児は不幸せです。（中略）工夫のつけかたによっては『家なき学校』でも立派にできるものだと考えています。が、保育にあつては特に『家なき幼稚園』



▲久保健太氏

が自由で簡単に愉快だと思われれます。(中略)どうか『家なき幼稚園』の別項の『実行案』を御覧下さいまして、御会得が参りましたら御子たちの御入園を切望いたします。」

100年前の文章なんですけれども、『幼児の教育』誌のバックナンバーをネット上で検索すると、第73巻(1974年)第2号から全13回で、橋詰さんの文章を紹介しています。「家」という言葉には現代とは違う意味合いがあると思います。当時は、お父さんが一番偉くて、父親の言うことを子どもたちは聞きなさいという時代です。大人が決めたことが絶対で、子どもたちはそれに従う存在だということが、「家」という言葉に込められているようにも感じます。

そのような「家」から子どもたちを解放する、閉じ込められている子どもたちを野に放つ、という橋詰さんの思想を、お二人にぜひ紹介したいと思い準備しました。

野村 橋詰さんの思想にはとても共感します。
喜一郎 いや、知りませんでした。とても共感します。

安全・安心の風潮の中で

久保 大人の管理下に子どもを置いて、安全・安心を第一にしようという状況は100年前の橋詰さんの時代よりも強くなっているように思いますがいかがでしょうか。

野村 自然の中の活動をする上で、皆さんが懸念されるのはまさに安全の面ですね。

だけど私は、子どもたちを危険から遠ざけるだけが安全管理ではないと思っっているんですね。子どもたちが自分でちよつと危ない体験をして、どうしたらここから落ちないかとか、どこの木が折れや



すいかとか、体験していかないと学び取れないところがある。側溝をのぞき込んだりとか、ああいう体験をしながら、子どももけがをしたくないのので、危険を見抜いて避けるようになりません。それをお伝えすると保護者の方も保育士さんも、そうだよねとうなずいてくれるけれど、実際にやるとなるとハードルが高いところがあるのかもしれない。

久保 確かにそうですね。

野村 先ほども言いましたが、家なき幼稚園の考え方にはとても共感します。100年前も発信されていた方がいらつしやるということに、うれしさも感じました。

家の中、園内は人工的に作られているので、大人の発想からなかなか抜け出せないのでは、ということには私も感じています。自然のほうが季節によって景観も変わるし草木も変わるし、変化に富んでいて多様な体験ができます。

喜一郎 危険というテーマが今出ましたが、

僕も全く同感です。きらりは、園庭代わりに地域資源を使って積極的に園外に出るって腹をくくったわけです。その時に職員に投げかけた言葉が「危なくなかったらやる、危ないからやらないという、『やるかやらないか』の白黒の選択肢しかないのか？ それだったら、最終的にはみんなやらなくていいという答えを出すんじゃない？ もしくはできないっていう答えを出すんじゃない？ ほとんどの人は不安だから、できない理由を探すようになるよね？ じゃあやらないのと同じじゃん。リスクがあることは事実だけど、どうやったらリスクに付き合ったり回避したりしながらやるか。どうやったらできるかを考えない限り、永久にできないよ」って、少し毒舌で呼びかけました。そして「どうやったらできるかを考えれば、アイデアが出てくるんじゃないの？」って言いました。

そこから園外に出ていく保育がスタートし

ているので。保護者にも同じことを伝えていきます。

久保 どうやったらできるかを考えましょうというのとは大切なメッセージですね。

喜一郎 現在のコロナ禍の状況も良い例で、コロナだからやります、やりませんという選択肢は、きりぎりにはないんです。コロナだけれどどうやってやるかを考えるのが、うちの考え方です。どうやったらコロナの状況下でも安全に活動できるかということを考えて、今の子どもが最善の利益が得られるようにやらなければいけません。不安なのはわかりますが、それだけにとらわれて質を下げたり、子どもが豊かな経験ができないってことでもよいのですか？ そういう問いが僕の中にはあるわけです。

久保 とても大事な問いだと思います。

喜一郎 子どもの遊んでいる写真とか山登りの写真を入園前の説明会で親御さんに見ても

らうのです。

「子どもの表情を見てください。本気でやっているとか、楽しんでいるとか、克服したいとか、ものすごく真剣に向き合っている表情を感じませんか？ これが子どもの成長のきっかけだと思いますよ。簡単にできることを簡単にできて良かったね、は確かに簡単に良かったかもしれないけれど、子どもって、ちょっと危険だったり難しいからワクワクしてやったりするんじゃないんですか。うまくやりたいって努力するんじゃないですか。そういう時、子どもってすごい集中力で、神経を研ぎ澄ませて活動をしているから、変なことはいしませんよね。危険を感じながら慎重にやりますよね。だから事故がないんです。子どもが本当に向き合いたいと思うタイミングで海に入っているんです。だから海にはみんなと一緒に行くんです。でも、無理に子どもを海に入れることはしていません。海や危険と

どう向き合うかは本人が決めること。定期的に通うことで、好きになっていくんです。2、3回行くと海に入りたいと言うようになるんです。その子によってタイミングが違うから、やりたいというタイミングが出てくるように同じ場所に何回も通うことによって、その子が自分の興味・関心を広げて深めるチャンスをつくるというのが僕たちの仕事です。それが最終的にはリスク管理になっていきます」ということを保護者の方には伝えていきます。

地域のにぎわいをつくる

喜一郎 もう一つ。一年に1回ぐらいですが、地域の人からのクレームの電話が市に行くことがあります。内容は、「子どもたちが町を歩いている」というわけですよ。

ただ、私が思うのは「町に出ているということは、子どもたちが新たな学びと向き合おうとしている」ってことです。町の大人一人

ひとり子どもを見守ろうという意識をもつてくれていたら、危ないから出すなという発想にはならないと思うんですよ。

逆に、良い学びをするために積極的に先生が園外に子どもを連れて出している。これを、安全に子どもが町で生活できるように応援しなくちゃ、という町にならないといけないんじゃないかと、保育園仲間と話しています。

きらりの功績を自慢するとすれば、私たちの園が地域に出た結果、地域ににぎわいが起きたんです。うちの子どもたちがいつも町にいるんです。どこの公園に行っても、駅の周りにも、きらりの子たちがいるんです。そういうことを10年やった結果、地域の園が外に出るようになったんです。今、相模大野は子どもにあふれているんです。子どもが出ていんだという雰囲気になったんです。逆に出ないと楽しくないじゃん、という雰囲気になってきました。

久保 にぎわいが起きるっていうのはいいですね。

喜一郎 私たちの役割は地域のにぎわいをつくることなんですよ。だから幼稚園、保育園に地域の子どもを囲い込んではいけないと思います。半分の時間は囲い込んでよいと思うんですけれども、半分は地域でかわるようにはしないと、地域から子どもが消えますよ。

宮里 とても大切なことが話されたと思います。保育の場にいた人間として思うことは、喜一郎さんの話は熱を帯びていて、大きな変革を求める意見のようにも思えるけれども、私はほんの小さな意識改革ですっかり変わると思えることだとも感じました。

例えば、遠足に行くときも、楽しくてたまらないという人と行ったときと、しつかりやらなきゃという人と一緒に行ったときとでは、同じ遠足なのにすっかり変わりますよね。

園外に出ていくことの魅力と可能性につい

て、今日の話し合いをきっかけに自分の中で問い直してみたいなと思います。お二人の話から刺激を受けて、うれしかったです。

久保 倉橋惣三が風光明媚な宝塚の家なき幼稚園と、ごく平凡な池田の家なき幼稚園を訪れて、『家なき幼稚園』を訪ふ」という記録を残されています（本誌第24巻第1号 1924年）。

そこで倉橋は、ごく平凡な池田のほうが普通の典型でなければならぬと書いています。倉橋は立派な環境がなくとも、ちよつとした工夫で変えられるということを書いたかたのではないかと思います。まさに今日、私たちがたどり着いた結論と重なります。

今日は長い時間ありがとうございました。皆さんとは今日をきっかけに折を見て集まりたいですね。また機会があったら、今度こそ対面で。喜一郎さんの園にでも集まりましょう。

（2021年7月7日 Zoomにて開催）

つながっていくそれぞれの「思い」

平野亜季

(幼稚園教諭)

これは、昨年受け持っていた年長あお組での出来事です。年中からの2年間、担任として一緒に過ごしました。コロナ禍の中始まった一年でしたが、そんな状況でも変わらない子どもたちの生き生きとした姿と充実した日々を思い出しながら、振り返りたいと思います。

毎年年長組が育てている畑の野菜。いつもは子どもたちと植える野菜も、コロナ禍による休園のため、先生たちで畑を耕し、苗を植えました。苗植えはできなくても、生長する過程や収穫を子どもたちと楽しもう！とそ

の後に期待していました。ところが、そんな年に限って毎日雨続きで太陽が出ず、どの野菜もなかなか生長してくれませぬ……。どうにか伸びたツルからようやくやく育ったのは、1本のキュウリでした。

待ちに待った記念すべき初収穫。くるくるキュウリを回すとプチンと切れ、自分たちの手の中に。その1本がうれしくてうれしくて



平野亜季（ひらの あき）
十字文字女子大付属幼稚園教諭。



飛び跳ねて喜ぶ子どもたち。そんな姿をほほ笑ましく眺めながらも、私の頭の中では（年長2クラスでどうやって食べよう？ スライスしても1人何枚かな……。今日食べたって声が出るかな）、そんなことを考えていました。でも、喜ぶ子どもたちから最初に出てきた一言は、「もも組さん（年少）とすみれ組さん（年中）にあげに行こう！」でした。（え？このたった1本を?!）と予想外の言葉に驚いていると、「どうやってあげる?」「ここ切る?」と相談まで始まっています。私が考えていたこととはあまりにも違い過ぎて、驚き感心するとともに、少し恥ずかしくなった瞬間でもありました。少ないからとか、初収穫だから、

ということとは子どもたちの頭にはなく、自分たちの野菜だからあげられる、あげるための野菜、とまで思っているかのようでした。そんな真つすぐな思いをかなえたいと思いましたが、現実的に考えるとやはり数が足りないもので……。まずは年長組で味見をして、おいしかったらあげに行くことでどうにか話がまとまりました。

後日、再び収穫できたキュウリを塩もみにして、念願の〆お裾分け〆をしました。「食べやすいように、うす〜いのにしてあげよう」。キュウリをスライスする子どもたちからはそんな会話が聞こえてきました。

その後もうれしい楽しい出来事があるたびに、下の学年を意識した言動がありました。梅シロップができるとまず「あげたいね」の声が上がり、園庭にミカンがなるとミカン屋

思います。そして、憧れのあお組になったんだ、という事実が大きな自信となり、今度はほくたちがやってあげたい！ わたしたちならできるはず！ と、一気に思いがあふれて飛び出していったような感覚でした。

年長さんしてもらったことや見てきたことが積み重なり、それが基盤となっていたあお組での生活。子どもたちは一年を通して、何かをしてあげること喜びを感じ、全力で思いを注ぎ続けていました。はじめは憧れの年長さんをまねて「やってあげる」という行為を楽しんでいたかもしれませんが、でもその思いが続いたのは、自分たちがされたときのうれしさや特別感を思い出したり、自分がしたことで相手が笑顔になったり、感謝される喜びややりがいを確認に感じていったからだと思います。子どもたちと相談や準備をしな

がら、誰かのためにとか、人を喜ばせるってこんなにワクワクすることなのだなあ、と私もあらためて感じさせられました。

園の最高学年でもある年長児の活動や姿は、それだけ影響力があり、重要な存在・役割となつていきます。だからこそ誇らしいし、頑張れるし、優しくなれるのかもしれない。

今年是一年少組の担任として、昨年とは違った向きから年長さんの姿を見ています。そしてそんな存在がいてくれることの大切さやありがたさを感じているところです。子どもたちはそれぞれに今、お兄さんお姉さんの姿をどんな目で、どんな思いで見ているのかふと考えます。

温かい思いの連鎖、そして幼稚園という集団の中で巡る大きなつながりを感じる思い出深い出来事でした。

保育をつなぐ

～ お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信 ～

Vol.12

海外とのつながり

上坂元絵里



シリーズ「保育をつなぐ」は3年間の連載で12回を数えます。これまで、附属幼稚園からは学級担任、フリー教諭、養護教諭、事務職員と多様な立場の教職員が、お茶の水女子大学学内から学内保育施設いずみナーサリーの保育士、大学の子ども学コース教員が、さらに旧職員代表として元附属幼稚園副園長が、附属幼稚園の教育・保育をめぐる、それぞれの立場からのつながりについて綴ってきました。

本シリーズは今号で一区切りとなります。最終回は附属幼稚園に国内外から訪れる参観、研修の訪問者との交流について、2年前に戻って、印象深かったつながりを振り返っていきます。

長期にわたる新型コロナウイルス感染症の影響で人とのつながりが大きく制約されている今だからこそ、子どもたち、さらには教職員、保護者、研究者にとって国を超えて幼児期の教育がつながることの意味を再確認できればと思います。

*

上坂元絵里（かみさかもと えり）
愛育幼稚園（東京都港区）園長。
前お茶の水女子大学附属幼稚園副園長。

およそ2年前、当初は遠い出来事と思われる新型コロナウイルス感染症が、瞬く間に日本でも猛威を振るうようになりました。保育所や幼稚園、小学校等が感染拡大防止対応に追われ、それまで当たり前につながっていたさまざまなネットワークが断たれる予想だにできなかった生活が始まり、続いています。

令和元年度までは附属幼稚園には国内外から多くの参観、研修の依頼が寄せられていました。令和元年度実績は、国内は公開保育と合わせて約350名、国外は十数か国、100名を超えます。こうした各地からの訪問者を受け入れ案内し、園舎園庭の環境、子どもたちの様子、本園の教育について説明するのは主に副園長の役割で、多くの出会いの中に、印象に残る場面がいくつもありました。

海外からの来訪者

欧州から訪れたA女史は、正面玄関から園

舎に入り、中央廊下をほんの数歩進んだだけで、「ここにいる子どもたちが満たされて過ごしていることがわかります」と話され、私は「まだ到着してほんのわずかしかったくないのに」と、とても驚かされました。別の日、やはり欧州から来訪のB氏は、園舎から園庭を一回り巡ったところで「私もこの幼稚園の園児として過ごしてみたかった」とつぶやかれました。附属幼稚園の毎日の生活は、短時間見ただけでは伝わりにくいのだとは思っていたのですが、子どもたちがじつくり、一生懸命と体を動かして遊ぶ姿から確実に伝わっていくものがあると確認できました。

海外からの来訪は、子どもたちにとって強く興味を惹かれる出来事で、毎年、自主的に案内役を買って出てくれる子が現れます。近年、幼児期から英語を学ぶ子どもも増えて、「ハロー、マイネームイズ○○」と自分から話しかける、中には来訪者からの簡単な問

いかけに英語で答える子もいます。小学校への英語教育導入で加速している英語の早期教育に賛同するわけではありませんが、実際に外国語でコミュニケーションをとる体験は、子どもたちのグローバルな視野を育てるきっかけになるのかもしれませんが。

A子の「ジョージア」メモ

JICA^{*}からの参観依頼で、ジョージアからの訪問を受けたことがありました。JICA職員である保護者に送迎時に「ジョージアからの訪問があるんですよ」と伝えたのを聞いていたのか、A子はある時、私に「ジョージアってどんな国なの？」と尋ねてきました。ジョージアの国旗は思い浮かぶけれど、とっさに答えられる知識は持ちあわせず、「私もあんまり知らないの。A子ちゃん、何かわかったら私にも教えてね」と答えました。数日後、登園時に門に立って朝の挨拶をする私に、A

子が小さなメモを手渡してくれました。少したどたどしい鉛筆書きで、ジョージアの人口や特色が書かれていました。「ジョージアは、スポーツにたいへんちからをいれていて、ほんのすもうによく似たチダオバというものがある」といった内容でした。東京2020オリンピックの柔道で、ジョージアの国名を耳にするにつけ、A子のメモの内容が思い出され、活躍の背景が理解されて、一人納得する思いでした。A子が過ごす自分の幼稚園に海外からの訪問者が多かったこと、自分の親が海外とつながる仕事をしていたこと、こうしたつながりがA子の中で、これからさらにどうつながっていくのか楽しみな気がします。

中西部アフリカとの連携プログラム

もう一つ、お茶の水女子大学が10年以上継続しているJICAとの連携プログラムで、中西部アフリカの教育関係者が毎年、幼稚園

* 国際協力機構

を訪問、研修する日がありました。附属幼稚園への訪問は運動会前後の時期にあたることが多く、年長児が事前に訪問国の旗を描いて歓迎し、運動会の踊りを披露したり、保育室での交流タイムにアフリカ各国の先生方に質問をしたりします。中には民族衣装を着ている方もいて、園にある楽器で即興で楽曲を披露したり踊りを見せてくれたりすることもありました。リズムカルな動きや子どもたちへの親しみをもったかわり方は、私たちも学ぶところが多く、教育的に意味深い時間です。

玄関に地図を掲示

写真は、令和元年度に作成を試みた訪問者世界各地からの来訪者が続いたので、玄関ホール



した世界地図を張り出し、そこに来園された国の旗を持ったマスコットを貼り付けることにしました。

実はこのアイデアはボランティアの保護者から出されたものでした。保護者ボランティアに絵本の修理を依頼した際に、

印刷した世界地図を貼り合わせる作業もお願いしました。作業をしながら保護者の一人が、「訪問者の人の絵を地図に貼り付けたらいいのでは」とつぶやかれたのがヒントになり、絵を描くのが得意な教員に民族衣装を着たマスコットを描いてもらうことにしました。世界地図を掲示した壁面近くにはソファが置いてあり、子どもたちがそこに座って、地図を



見ながら「日本はどこ?」「私が生まれたのはマレーシアだった」「お父さんはアメリカに行ったことがあるよ」「私はここに行くんだ(パツと指をさして)」などと会話している光景を時折見かけました。私たちが子どもだった頃と比べ、世界がぐっと身近になっていることが伝わってきました。

通訳になりたいという夢

私は小学校の頃、通訳になりたいと思っていたことがありました。ちょうどアポロの月面着陸といった世界的なニュースが報じられ、同時通訳という仕事を目にしたことがきっかけになった記憶があります。幼稚園教諭として働きつつ、もう一つ夢がかなったわけです。会話力は初心者レベルですが、幼児期に大切にしたいことを、実際に子どもたちの姿を目の前にしながら伝えようとすると、乏しい英語力でも伝わっていくものがあります。ある

時、B児の母親が「Bが『副園長先生みたい』に英語が話せるようになりたい」と言っていました」と声をかけてくださったことがあり、B児がそんなふうに見ていたことに驚かされ、実際は大した英語力でなくても、一人の子どもが「英語で話せるようになりたい」と思うきっかけのひとつになったならうれしいことだと思っただけです。

前述の中西部アフリカからの研修生の方々、それぞれの国に戻れば多大な影響力をもつ立場にあり、盛りだくさんな研修プログラムにエネルギーに向き合う姿勢に圧倒されるものがありました。子どもたちが遊ぶ様子を紹介しながら「子どもたちの輝く目、動く心を大切に」と一生懸命伝えようと、その先生もキラキラとした目でうなずいてくれたことが忘れられません。母国語、外国語に関係なく、伝えたい思いをもって話すことの大切さをあらためて感じた瞬間でした。

幼児期の教育で大切にしたいこと

アジアの国々からの訪問者を受け入れる中で、幼児期からの早期教育重視から、幼児期の遊びを大切にする教育へと移行しようとする方針転換を感じる機会が多くありました。今こそ子どもを中心に置き、子どもが自分で考え、判断し、選択する力を育てる幼児期の教育の意義を伝えていくときだと感じました。

附属幼稚園が大切に行っている、子どもの主体性を育み、遊びを中心とした幼児期の教育は、短時間の訪問で見ただけでは、参観後に少し説明を加えたとしても伝わりにくいのではないかと考えていました。しかしながら、子どもたちがのびのびと、力いっぱい生活する姿から、幼児期の教育で大切にしたいことは伝わり、そして対話を通して私たちもあらためて学ぶことがたくさんありました。

まとめにかえて

私は、長年お茶の水女子大学附属幼稚園の教員として勤務し、現在は私立幼稚園の園長として、保育の現場で、今までと同じ、近い、少し違う、こんな考え方もあると新たに感じながら日々を過ごしています。今の勤務園が立地する場所の特色として、ダブルルーツをもつ在園児も多く、通園時に保護者同士が英語で会話する姿も珍しくありません。子どもたちが多様なひと、もの、こととつながり育つことを支え、後押ししていかれたらと願っています。

人の往来が回復し、附属幼稚園の子どもたちの姿を共に見て、感じ、学びあい、子どもも大人も育ちあう日々が戻ることを切に願ひ、附属幼稚園がこれからも多様なつながりの中で新たな発信を重ねていられることを応援しています。



—おわり—

「育ての心」で語りあう

～動画を囲んだDX時代のカンファレンス～

▶ Vol.4 子どものアンテナに大人が気づく



「プラムの実1」

この連載では、保育動画を囲んで、保育者、研究者、保護者、子どもに関心のある人、関心のあまりない人、いろいろな人が語りあっていきます。

今回のメンバーは5人です。桐朋幼稚園の保育者である市川さん、井口さん、能登さん、桐朋小学校の教員である伊垣さん。そして、研究者である久保健太です。今回は、幼稚園教諭と小学校教諭と研究者とで、幼稚園児の姿を囲んで語りあいました。

(構成：久保)



K君のアンテナに気づく

市川 まずは、四つの動画を見てもらえますか？ 今年（2021年）の4月に入園してきたK君という3歳の男の子の動画です。

一同 （動画「プラムの実1〜4」を見る）

市川 彼の世界を追ってみたい、どういこうかを考えて、どんなことを感じて過ごしているのかを少し追ってみたいという気持ちで、この日はついて行ってみたいですね。そうして彼について歩いてみて、わかったことがあります。

まだこの時、4月の中旬で、入園して2週間ちょっとくらいなんです。それまでは、彼は自分の興味の向くまま、欲望のままに、いろいろ周囲を探索しているんだろう、一人の世界を楽しんでいるんだろうって思ってたんですね。

けれどもカメラで追ってみたら、彼がアン

市川杏子 桐朋幼稚園（東京都調布市）教諭。
能登比呂志 桐朋幼稚園教諭。
久保健太 関東学院大学教育学部専任講師。

井口陽南子 桐朋幼稚園教諭。
伊垣尚人 桐朋小学校教諭。



「プラムの実2」 「プラムの実3」 「プラムの実4」



テナを張っていることがわかったんです。例えば、一つ目の動画の30秒くらいのところ
で「ご飯できたよー」っていう他の子ども
の言葉を拾って、その遊びに興味をもってい
ます。その後も、上の子どもたちのフライパン遊び
に興味を向けています。

また、このあたりで、3歳の女の子がK君
の青いバケツをK君から取ろうと追いかける
場面があります。
実は、女の子は自
分たちが使ってい
たものをK君が持
って行ってしまっ
たと勘違いしての
行動でした。子ど
もたちの世界って、
こういうことがよ
くあります。その
代弁をしてあげら

れなかったことが2人に対しての私の反省点
です。子どもたちの思いの代弁や橋渡し役は、
保育者の大事な役割だなと映像で振り返って
考えました。

二つ目の動画では、K君はプラムの実にも
興味をもっていますね。

久保 三つ目の動画では、K君のバケツの中
にいっぱいありますね。

市川 そうなんです。しかも、プラムの実を
通して、周りの子どもたちともかわりをもっ
ているんですね。

久保 カメラで子どもを追ってみて、市川さ
んがその点に気づかされたわけですね。

市川 上の子どもたちの優しさにも気づかされま
した。

久保 プラムを分けてくれたところですね。

市川 ただ、この場面は「ありがとう」の押
し売りみたいなことをしちやっただっていう反
省もあります。



四つ目の動画の7秒あたりのこの顔、いいですよね。

一同（笑）

市川 しかもね、上の子に助けてもらうだけじゃないんです。動画には写ってないんですが、上の子たちの困っていることをキャッチして、「こうしてみれば」ってアドバイスまでしていたんです。

そういうふうにごいアンテナを張って、だから全然一人の世界じゃなかったんだってことが、私には衝撃的でした。こうやって、人とつながっていくし、こんなに友達や周りの環境に興味があるんだってことがとても面白いなと思いました。

それからさらに2か月がたって

市川 動画で見ていただいた場面は4月ですが、それから2か月たって（座談会は6月）、

K君への理解をさらに深めているところです。今は、感度のいいアンテナがK君にはあるんだなって、それを大いに耕せばいいやつて思っているところなんです、その点も含めて、皆さんはどうですか？

能登 一人で遊んでいるものだと思っていたけど、そうではないんだとか、自分のタイミングで人とかかわりをもっていたのかな、という……。

市川 そうです、そうです。

久保 このあたり、せつかくですから、一緒に3歳クラスを組んでいる井口さん、どうですか？

井口 例えば、泥とかが大好きで、その泥を、自分ももちろんドロドロなんだけど、人とかにも付きたい、というのもあったりして。

久保 K君？

井口 そうです。それは人との交わりですよ。K君発信で、欲望を他の人と交わりなが

ら満たそうとしているっていうことなのかな
って思いますが。

市川 園長先生にも言うんですよ。「園長先生、
付けてもいい？」って。

井口 付けたいという欲望があるのはいいと
思うんだけど、相手は付けてほしくないかも
しれないから、付けたいんだったら聞いてか
らにしてくれる？ っていうのは伝えていま
す。(笑)

市川 だって嫌でしょう、泥を付けられるの。

久保 (笑)。ただ、K君は、人への信頼がし
っかりと育っていますよね。

市川 そうですね。

久保 信頼っていうか、共振してくれるもの
だっていうふうに信じている節がありますよ
ね。例えば、わが家には0歳の息子がいて、
ベビーせんべいみたいなのを食べているわけ
ですよ。で、「うめえ」って顔をしながら、
父ちゃんも食ってみろって、よだれベロベロ

のベビーせんべいを僕の口に付けてきたりす
るんだけど、それを思い出しました。

井口 ああ。楽しさを共有したいってこと
なんですかね。

久保 共振っていわれるような、言葉以前の
関係に近いですよ。ね。「楽しいね」「おしい
ね」といった言葉は使わずに、一緒に食べて
ニコツとして、相手と応答している感じです。

どういう願いをもって保育者がかかわるか

伊垣 以前に知的障害がある子を担任してい
るとき、その子も食べ物を口から差し出すつ
ていうことがありました。最初は理解できな
くて、「ダメだよ」って伝えていたのですが、
まさに今言われた、おいしいものを共有して
くれるって文脈で理解し直したら、受けとめ
方が変わりました。その子とも、受けとめ方
が変わってからは仲良くなったんです。

だから、かかわり方とか、こっちがその子

たちをどう受けとめるのかっていうのがベアスにあつて、それが、その子がどう伸びてくるかにすごく影響を与えることがあるんだなつて思っています。

市川さんのかかわり方もそうだし、井口さんのかかわり方も含めて、どういう願いでかわるかが大事なんじゃないかと。市川さんは、K君の世界を知りたいつて言つてたけれども、そこがすごく大事なところだなつて。

市川 うんうん。

伊垣 ボタンの掛け違いが起こるとしたら、「この子をこうしたい」つて思うか、「この子の世界を知りたい」つて思うか、そこだと思ひます。「この子をこうしたい」つて思ひでいると、子どもはそうなつてくれるけれど、その子らしさとか、その子が自分で伸びていく、育つていくというよりも、その先生ないしは保育者にすごく影響されて、そこにはまつていくんです。僕もそういう失敗をしてきたこ

とがあります。

桐朋小学校に来てそういうプレッシャーがなくなり、子どもは子どもらしくいる、子どもを原点にしようつていうのを中村校長（園長兼任）ともよく話しています。あつためてそこが大事だと思ひました。

井口 そこをもうちよつと教えてください。

伊垣 自分の懺悔でしかないんですけど、やつぱり学校つて、やることが多いんですけど、幼稚園も同じだと思ひますが、そうになると、「短い時間の中でいかに子どもたちを」つていうふうな考えがちになるんです。そうすると、理解してあげるといふ前提に立つ前に、どんどん処理していくつていふことが、学校現場では起こりがちなんです。

一方、幼稚園では、子どもとかかわるときに「その子を知ろう」といふことをスタートにしているし、それを皆さんが口にしてる。市川さんのかかわり方を見ても、「そ

う所にあるの？」とか「もう少し探してみよ
うか」とか、答えを言うわけじゃなく、常に
子どもに呼びかけている。本人は「ありがと
うの押し売り」って言ってたけど、僕は全然
押し売りとは思いませんでした。

市川 ありがとこのことでは、最初、K
君は小さい実しか見つけられなかったんです。
私は、そんな彼にも付き添っていたから、あ
んなにたくさんの実が入った、あのお皿を見
たとき、彼の心がどれだけ動いたかっていう
のは、一緒にいてすごくわかつたんですね。

久保 三つ目の動画のところですね。

市川 だから、なんかもう私が感動したし、
こんな偶然ってあるんだっていう。こんなに
欲していたものを、こんなにたくさん持って
いる人が今すれ違って、しかも、それを分け
与えてくれようとしている。そしてK君の気
持ちは動いていた。だからここはありがと
チャンスだなって。

伊垣 (笑)。いいんじゃないですか。あの場
面が成立したのは、K君の「渡してくれた」
っていう一言があったからだと思うんだよね
(三つ目の動画の42秒あたり)。

市川 ああ。

伊垣 そして上の子たちはそこに触発されて、
もつとやろう、もつとやろうってなった。先生
がいなければ多分そうはならなかったと思う。
ある意味、触媒になっているし、彼の願いをか
なえてあげる役割をやってるんじゃないか
な。放っておいたら放つとかれちゃうのかも
しれないよね、K君は。あの場面で。そこを
接着してあげる役割をしたんじゃないかな。

市川 もつとね、関係が進んでいる今だつた
ら、そこに私たちがいなくても、あっちゃこ
っちゃあつたかもしれないけど、それがまだ
4月の第2週つとところかもしれない。

(2021年6月14日 桐朋幼稚園にて)
以下、2022年春号に続きます。

お散歩を通じてまちで育てる

「まち保育」の視座

三輪律江

(大学教員)

1 「まち保育」とは何か

私の専門は、建築・都市計画、まちづくり、環境心理という分野です。その分野から、乳幼児期、学童期、青年期の子どもとまちとの関係に着目し研究テーマにしてみました。特に2007年頃からは、乳幼児の子どもたちが集積している場とまちとの相互関係に注目した調査研究や実践を行っています。

未就学児の子どもの育ちの代弁者とも言える保育施設は、単なる目的地への移動ではない日常的な外出を「お散歩」と表現して実施していること、身近な生活圏にある公園等の地域資

源の場所、子どもたちが好きなポイントなどを把握し、独自に「お散歩マップ」などに記載して日々の保育に活用している園もあること、そしてお散歩マップに示されている範囲はそれほど広域ではなく、しかし日常的にさまざまな地域資源を濃く深く活用している実態を明らかにしてきました。一方で、多くの保育施設は、立地する地域とのつながりの必要性を感じつつも地域との関係構築の仕方がわからないといった課題を抱えていることも明らかになってきました。

そこで、2012年度からいくつかの保育施設に伴走し、日常にお散歩をする小さな範囲のまちを、違ったテーマで繰り返し歩くことで、

三輪律江 (みわのりえ)
横浜市立大学・教授。博士(工学)。代表著書に『孤立する都市、つながる街』(日本経済新聞社 2019年、共著)、
『まち保育のスヌメ』(明文社 2017年、共著)等。

乳幼児期の子どもを真ん中に保育施設と地域のつながりを強めるさまざまな試み（「まち保育ワークショップ」）を実践してきました。それらの発想の経緯と実践ノウハウをまとめた書籍『まち保育のススメ』（三輪、2017）では、「まち保育」を以下のように定義しています。

「まち保育」は、子どもたちの生活をより豊かにするものです。それは、保育施設・教育施設の園外活動だけを指すではありません。まちにあるさまざまな資源を保育に活用し、まちでの出会いをどんどんつないで関係性を広げていくこと、そして、子どもを囲い込まず、場や機会を開き、身近な地域社会と一緒に、まちで子どもが育っていく土壌づくりをすること。私たちは「まち保育」と呼んでいます。

2 子ども目線で、まちを捉え直し伝える

まちにはいろんなヒト、モノ、バシヨ、コトがあります。調査研究で収集したお散歩マップ

には、「この公園は秋にはドングリがたくさん落ちている」「この道は焼きたてパンのいい香りがする」「この陸橋からは車掌さんがよく見える」といった情報が記載されているものもあります。子どもたちが毎日のお散歩でまちを楽しんでいる様子が目に浮かびます。そこで、まち保育ワークショップでは、日頃のお散歩のように、大人たちもゆっくりじっくり保育施設周辺を子ども目線でまち歩きし、気になるモノやコトがあったら立ち止まってそのポイントで写真を撮ったり感想を記録したりして、あらためて見直すということから始まりました。

また、幼児クラスの子どもたち向けには「キッズカメラマンワークショップ」も実施しました（写真下）。お散歩途中に楽しいもの、気になるものを見つけたら、子ども自身がインスタントカメラで撮影するというもの



▲「キッズカメラマンワークショップ」から。
（写真提供：まち保育研究会）

で、子どもたちが見つけたものと発見場所、その時に子どもが発した言葉を夕方には園内に掲示し、降園時に保護者も見られるようにしました。子どもたちは自分の撮った写真を自慢そうに保護者に教えていたりしたそうです。

3 お散歩を通して、まぢとの関係を築く

活動を開始して2年目に、保育者がまぢに受け入れられるようになったと強く実感し、ターニングポイントとなったまぢ保育ワークショップがありました。「ありがとうカード大作戦」というものです。ありがとうカードとは、毎日のお散歩で楽しませてもらっている各住宅の軒先にあるモノ（庭先の手入れされた花、実ると見て楽しんでいた実、子どもたちの大好きなキャラクターの置物など）の写真と、楽しませてもらってありがとうの気持ちを込めたメッセージも掲載されたカードで、これを渡しながらまぢを巡るという企画です（写真右下）。

元来、軒先の緑や花の手入れ、置物などは各

家が自身の敷地内で自らが楽しむために行っていることですが、この行為が見知らぬ誰かに潤いを与えていたり、喜びを与えているのだとわかって、嫌な顔をする人は一人もいませんでした。むしろそれをきっかけに、

自宅の庭でできた野菜を保育施設に届けてくれるようになったり、保育中ではない通勤時に保育者と挨拶を交わしたりと、日常の延長線上で双方の関係が深まったとも聞いています。

乳幼児期の子どもたちがお散歩するのはせいぜい30分〜1時間程度。それは本当にごく小さな範囲ですが、その範囲のまぢ全体・地域みんなが、さりげなく、小さな子どもとかかわれるようになり、まぢに変化をもたらすことにもつながっていったのです。



▲「ありがとうカード大作戦ワークショップ」から。
右は「ありがとうカード」。(写真提供:まぢ保育研究会)

4 まち保育の四つのステージ

私が唱える「まち保育」とは、子どもの育ちを血縁関係だけでなく地域社会で育み共有するため、多様な主体を巻き込みながら地域資源を活用するまちづくりの手法論です。そこには、まちで育てる―まちで育つ―まちが育てる―まちが育つ、といった四つのステージを読み解くことができました。

小さな生活圏でも、日々まちに出かけ、まちのさまざまな資源に気づき、まちの人との挨拶等を通して触れあいながらまちの子どもとして育っていくことで、まちをよく知り、お気に入り場所ができ、おのずとまちを舞台にして子どもが育つようになっていきました。小さな範囲の同じまちを違った視点で何度も歩くことで、地域のさまざまな組織や活動がつながっていき、交流の層も厚くなっていきました。さらには「○園の子」と認知されるようになり、まちの子どもとしての成長や安全に関心が及ぶようにも

なりました。

そして、まちに暮らすたくさんの人と顔見知りになっていくことで、保育施設が「住民」として地域に受け入れられているという保育現場の安心感にもつながりました。声掛けや見守りが自然に起こり、まち全体が子どもを育てる意識と共に、保育施設とまちがより自然に連携する体制を誘発していきました。

日々のお散歩をしている子どもたちは、むしろ日中まちに不在がちな保護者に比べれば、もうそのまちのエキスパートです。彼らを中心に、保育者も一緒になって、子どもの育ちにまちそのものが活かされ、まちにかかわっていくこと。それは、そのまちのコミュニケーションファンを生み出す、少し先のまちの未来を創ることに必要なはずです。

引用文献

三輪律江・尾木まり他『まち保育のススメーおさんぽ・多世代交流・地域交流・防災・まちづくり』
萌文社 2017年

ドイツの自然で育まれる心

野原咲子

(幼稚園教諭)

ドイツは、フリードリヒ・フレーベルによつて、現在の幼児教育の礎となるキンダーガルテンが誕生した地であり、近年は森の幼稚園など、ドイツの豊かな自然環境を生かした保育実践が多く見受けられます。実際にドイツで生活をしていると、都心であっても緑あふれた公園が多く、そこでは野ウサギやリスに出会ったり、おいしそうに実った果物を頬張ったりと、豊かな自然があるからこそその発見や楽しさが日常にあふれています。

私は現在、ドイツのとある街の日本人幼稚園で年中児クラスの担任をしています。広い園庭には、ベリー類や洋梨、ミラベラの果樹

など、自然がいっぱいです。池やビオトープでは、カエルやイモリ、ヤゴ、ザリガニなどの生き物と触れあうことができます。また、子どもたちが畑で野菜を育てたり、メダカやインコのお世話をしたり、ドイツの恵まれた自然を生かし、本物に触れる体験を大切にしている園です。

そんな園でのびのびと生活する子どもたちが、ある生き物とのかかわりを通して、身近な生き物へのまなざしやかかわり方が変容していったエピソードをお伝えします。

カタツムリとの生活

昨年のドイツの冬は異常気象といわれるほど厳しい寒さが長引き、6月頃まで安定しない天候が続く毎日でした。雨の日には私たちの幼稚園にもたくさんのかたつむりが遊びに来ます。私のクラスは生き物が好きな子が多く、朝の支度を終えると、カタツムリがたくさん見つかる畑やビオトープのある場所へと一目散に走っていきます。

そんな日々を過ごしていたある日、カタツムリを愛してやまないA児が「カタツムリを飼ってみたい！」と言ってきたのです。身近な生き物への関心やかかわりが深まる機会になれば、とクラスで飼ってみることにしました。早速カタツムリのおうちの準備からスタートです。その際に「なるべくカタツムリがいつも生活している所と同じおうちを用意してあげたいね」と子どもたちに伝えると、彼

らは大きな虫かごの中に、石や落ち葉を並べ、それらを水で湿らせ、カタツムリを見つけきた場所と同じようなおうちを作りました。しかしまだ年中になって2か月の5月。子どもたちそれぞれのペースで幼稚園での生活の中に楽しさを見つけ出していた時期でしたので、心が動いた人がお世話にかかわるといった緩やかなスタートでした。

カタツムリと子どもたちとのかかわりはどんどん広がっていきました。ある日はB児が粘土を出してきて、じっくり観察しながらカタツムリを作りました。それを見て、「ぼくも！ わたしも！」と次々にカタツムリの完成です。毎日手にとって遊んでいるだけあつて、その再現度の高さに、子どもたちの鋭くも豊かな眼に感動させられたことを鮮明に覚えていきます。

また、子どもたちは、カタツムリの絵本を読んで、食べ物によってウンチの色が変わっ

てくることを知ると餌を変えてみたり、殻の大きさによって何歳かわかることを知ると、カタツムリを連れてきては、何歳か推定ごっこを始めたりました。

生まれたモヤモヤ

「カタツムリの友達がいたよ!」と、クラスで飼っている3匹とは別に、多いときには20匹ものカタツムリを連れてくる日もしばしば。目を輝かせて生き物とかかわり、遊びを深めていく姿を喜ばしく思うのと同時に、コンクリートや砂ばかりの人間の世界に生き物を連れてくることに對して、私の心の中で何かモヤつとした感情が生まれるようになりました。カタツムリは環境をかき回されることで生きにくくなってしまっているのではないか。また、カタツムリとつながりあって生きている植物や生き物に何か影響が及んでいるのではないかと考えるようになったのです。言葉

に書き起こすと少し大げさな印象を受けますが、ぼんやりとそのモヤつとしたものが私の心の中でずっと引つかかっていたのです。

そこで私は子どもたちに、カタツムリにもおうちがあること、突然知らない所に連れて行かれると、カタツムリも驚くだろうから、みんながカタツムリのおうちに遊びに行くのはどうか、と提案してみました。しかし子どもたちは「うん! わかった」と口にしつつも、やはり翌日にはまた、人間の世界にカタツムリを連れてきては楽しんでます。なかなかうまく伝わらないな、と思っていたある日のこと、大きなきっかけとなる出来事が起きたのです。

命あるものとしてのモヤつ

クラスで飼っているカタツムリ以外は、元いた場所に返すように普段から声をかけていたのですが、あまりの数に返しきれっていない

こともありました。そんなある日、園庭に残っていたカタツムリが、年長さんが大事に育てていたヒマワリの芽を全部食べてしまったのです。緑の多い普段のすみかから、コンクリートと砂ばかりの場所へ連れてこられて、きつとおいしいものを探し求めたのでしょうか。

翌朝子どもたちに、カタツムリが年長さんのヒマワリの芽をすべて食べてしまったこと、みんなが連れてきたカタツムリが食べたかどうかは誰にもわからないけれど、カタツムリも生きていくために食べ物がある場所を必要としているのかもしれない、と話をしてみました。すると、子どもたちはこれまでにない真剣なまなざしで私の話を受けとめ、彼らなりに何かを感じているようでした。

それからというものの、子どもたちは「○○（生き物）のおうちに遊びに行つてきます！」と元氣よく出かけていきます。この出来事で、身近な生き物にも生活や命の営みがあること

を知った子どもたち。生き物を見る眼に「命あるものとしてのまなざし」が加わり、さらに、大切にしたいと思う気持ちが芽生えてきたような気がします。

何かを大切にしたいと思う気持ちは、誰かに教えられるものではなく、子ども自身が自分の心を働かせることで芽生え、育まれていくものだと感じています。

自然や身近な生き物とのかかわりは、子どもたちにたくさんさんの気付きや発見、感動を与えてくれます。これからも、自然の小さな変化に気づいたり、驚いたり、感動したりする心を大切にしていく中で、生き物だけでなく、他者とのかわりも豊かになっていくことを願いながら、子どもたちの生活に寄り添っていききたいと思います。



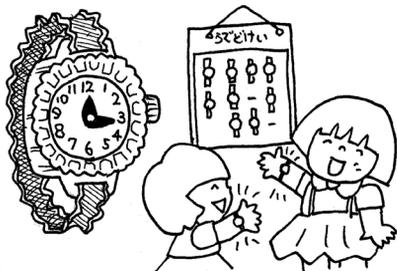
鎌倉おもちゃ屋物語

くろすかすきよ

その12

面駄玩具の紹介と
新米おもちゃ屋の
どたばたエッセイ!

おもちゃの腕時計、知っていますか？
私が日参していた昔の駄菓子屋には
ボール紙に糸で留められてズラーっと
ぶら下がっていて、かわいいので女の
子たちがよく買っていました。私も
たびたび買っていました。



長針と短針はくっ付いていていつも3時。

リューズを回すと3時のまま針がくるくる回るんです。ブリキのボディは爪を曲げて留めてあるだけなのでそれを開くと、中にはリューズと針の連動の簡単な仕組み。私は腕にはめずにいつも分解してそれを確認して楽しんでいました。大人になってから町の中古おもちゃ屋で古びた昔のものをいくつか見つけ、懐かしくて全部買って、さすがに劣化していてもう腕にはめられる状態ではないので、お店では一つずつ箱に入れて鑑賞用、お宝値段で売っています。

こんな魅力の腕時計のおもちゃは、
もう駄玩具屋の店先から消えました。

理由は？「大人が腕時計をしなくなったから」。

子どもはおもちゃで大人のまねごとをして楽しめます。
腕時計をするのはかっこいい大人の象徴……だったのに。



今の大人は時間をスマホで見ます。ロレックスやGショックなど自慢するための高級時計以外、大人の腕からほとんど消えた腕時計、子どもたちの憧れではなくなったのでしょう。



それから電話機。

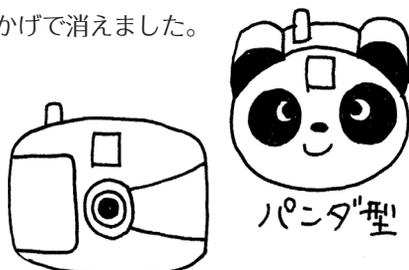
両側が丸いバーベルみたいな形の受話器を
耳と口に合わせて当てるとき、ピヨーンと伸びる
コイル状のビニールコード。ダイヤルの数字の穴に
指を入れて回して指を抜くと、ダイヤルは元に戻り
ながらジリジリと鳴ります。1はすぐ戻ってジリッ。
9や0だと大きく戻ってジリリリリ……。[もしもし]と
言うと自分の声を受話器の穴から耳に大きく響きます。



黒須和清 1955年東京生まれ。横浜在住。
洗足こども短期大学教授として手作りおもちゃや人形劇
を教えるかたわら、ペーパークラフトや執筆活動、研修
会講師の仕事などで忙しい。

この一連の操作の中に子どもの感性を刺激する面白い現象がいくつかあるでしょうか。それらがすべてなくなって、真っ平らのタブレットの面に触れるだけで通話する。なんて味気ないんでしょう。スマホ電話はおもちゃになりません。子どもたちの電話への興味もスマホのおかげで消えました。

そして……先日店に来た親子、
3歳ぐらいの女の子を連れて
お店でおもちゃを楽しんでいました。
「あーこれ懐かしい！」



デジカメ型

パンダ型

ママが手にしたのはカメラのおもちゃ、
のどきながらシャッターを押すと
中で動物の写真が次々変わります。
ママと連れママ友、大人2人は嬉々として
のぞいて楽しんでいました。そして娘に
「これ面白いよ、見てごらん」と手渡すと……。



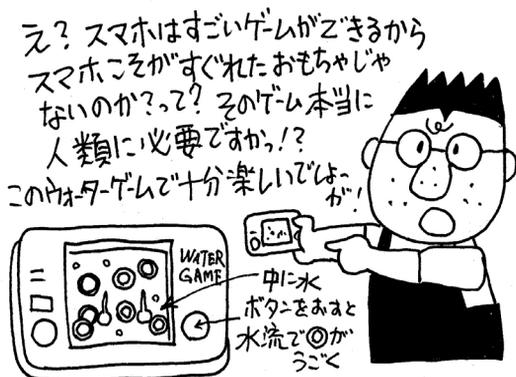
その子は受け取ったカメラを両手で持って
自分の胸の前あたりでカシャカシャとシャッター押すんです。
キョトンとして「何が面白いの？」といった顔。
そう！今、カメラはのぞかなくなったんですよ。撮りたい画像が映るから、
顔からは離して相手に向けるだけで写真が撮れる。その子は親がカメラをのぞ
いて写真を撮る姿なんか見たことなかったんです。

なんでも簡単にできるように開発する。いろんな機能を全部一つに盛り込む。
便利なのでしょうが、そのおかげで子どもの興味や憧れ心を刺激するおもちゃ
にしたときの魅力がどんどんなくなっていく。これ正しい進化ですか？ 時計も
電話もカメラも昔のままでよかったんじゃないですか？



おこつ
ますね

使いこなせない
くやしさを
怒りに
かえとる



え？ スマホはすごいゲームができるから
スマホこそがすぐれたおもちゃじゃ
ないのか？？？ そのゲーム本当に
人類に必要ですか！？
このウォーターゲームで十分楽しいでは
ないか！

中に水
ボタンをみると
水流の◎が
うごく

和光幼稚園は、子どもたちが自分のやりたいことを思い思いの場所でできるように、“好きな遊びの時間”をたっぷり取っています。その“好きな遊びの時間”で男女の遊びの傾向を見ると、

- ・ 3歳児は男女混じり合っってやりたいことをやっている
- ・ 4歳児は男子と女子で遊びの傾向が分かれるが混じり合っている
- ・ 5歳児も4歳児の延長。男子同士の関係、女子同士の関係が特徴的に表れると感じます。ただ、クラスによっては男子、女子の特徴がそんなに大きく表れることがないようです。

幼稚園では「女の子だから」「男の子だから」という分け方をして保育をすることはなく、保護者にも日々の学級通信で「男の子たち」「女の子たち」という伝え方はしていませんが、子どもたちのジェンダー意識には家庭での影響が大きいと、子どもたちとのやりとりの中で感じました。

8. 「からだ」の存在感を育む保育、子育てを

人間が動物と明らかに違うのは、多様な営みをする「こころ」（感情）があるからでしょう。一人ひとりの「こころ」は、「からだ」があり生きているからこそ、その動きが感じられ、次の動きにつながっていきます。

「いのち」はかけがえのないもので大切にされなければならないことは、小さい子どもでもわかることですが、「いのち」は、「からだ」の中にあるのです（和光小学校は〈領域別総合学習〉として「からだ・こころ・いのちの学習」としています）。

「からだのはなし」の最初の時間に子どもたちと読む絵本『からだっていいな』（前出）には、「からだはこころよりも正直者であり、快・不快の受容器と発信器になり、快適に生きていくための指針となる。」と山本直英さんが「あとがき」に書いています。そして「ありきたりの日常生活の中で、身体あつての楽しい現象、『からだっていいな』に気づかせる」ことを大切にしたい、と。山本さんは、「からだ学習」のポイントとして、以下の5点を挙げています。①からだの個人差を認めること、②からだの快感を肯定すること、③からだのプライバシーを尊重すること、④からだの自然体で生きること、⑤自分のからだの主人公になること。

どれも、大人の私たちもこのような「からだ観」を持っているかどうか問い返す必要があるのではないかと感じることです。自分自身や子どものからだを不当に管理され、抑制されていないか、そんなことも考えさせられます。

自分のからだを認識し始める幼児期に、「からだっていいな」という感覚を育むことが、自己肯定感を育む第一歩であることをこころに刻んでおきたいと思っています。

次の時間は、ねらいを「女の子だから、男の子だから、ということで制限されたことについてどう感じたか言葉にする。男の子、女の子にとらわれず、自分がやりたいことをやっていいことがわかる」とし、男の子は（女の子は）〇〇してはダメって言われた、ということはあるかを聞きました。なおきくんは「男の子は女の子にいじわるしない」と言います。「誰に言われたの?」と聞くと、「自分で」、つまりそのように思っている、ということでした。「男の子だから泣いちゃダメ」と言われたことがある人、と聞くと数名が手を挙げます。「パパに言われた」「パパに言われたことある」という発言を聞き、かずくんは「泣きたいことは恥ずかしいことじゃない」と言います。遊びについて尋ねると、女の子と男の子が分かれて遊ぶ、という声。「女の子と遊ぶと恥ずかしいから」や「いつも〇〇（男子の名前）と遊ぶよ」と男子からの発言でした。

別のクラスでは、直前に遊んでいたドッチビー（柔らかいディスクを投げあう遊び）に、10名ほどの男子の中に女子が2名加わっていました。ドッチビーやったことある人、と聞くと、女子も数名手が挙がります。あえて男の子しか遊ばないものを尋ねると、「サッカー」という答え。すると女子から「やってる!」とすかさず声が上がります。男子のほうが多いかもしれないが女子もやる、ということがわかりました。女の子しか遊ばないもの、には「人形ごっこ」という声。すると、はるくんは「やるよ!」。まなみちゃんの「プリキュアごっこ」という意見に、「そうそう」という声が上がると、けいくんは「やるよ」、りかちゃんは「悪者になるのは男の子だよ」「この前（悪者になった）しようたくんが泣いててかわいそうだった」と続きます。このころ女子数名の間にはやっていたビーズとひもで作ったネックレス、イヤリングなどを着ける「モデルごっこ」には、いくみくんが「男もやるに決まってるよ、写真撮る人じゃん」と言います。その他、あやとり、コマ回しなどが出されましたが、男女両方とも遊ぶ、とわかりました。

女の子だからダメ、と言われたことは? と尋ねると、ちえちゃんは「男の言葉を使っちゃダメ、と。ママに」。「どんな言葉?」と聞くと「きたない言葉」「ちんちん、とか」。他にも「きたないこと言っちゃダメ、と。ママに」「女の子だからけんかしちゃダメ、って。ママに」と続きます。男の子だからダメ、と言われたことは? と尋ねると、「(先生の名前を)呼び捨てしちゃダメ」「家の中でサッカーしちゃダメ」など、“男の子だから”ではないことが出されました。はるくん、いくみくんは「男の子だから泣いちゃダメ、ってパパに言われた」と言うので、「男の子は泣いちゃダメ?」と子どもたちに聞きました。すぐに数人の女子がはっきりと「ダメだよ」と声をそろえて言い、「男の子は強いもん」「足も速いし」「女の子は弱いもん」などなどと続きました。はるくんは「男の中でも力が強い人もいれば、〇〇みたいに弱い人もいる」と発言。「男の子も泣きたいときはあるよね～」と私は言いましたが、「でも泣いちゃダメ」と女子からの声です。最後に、先生は、男の子でも女の子でも泣きたいときには泣いてもいいと思う、と伝えました。

すること』『女の子がすること』についてはっきりした考えをつくり上げるのもこの時期の子どもの特徴です。他の子ども、自分自身の性別のメンバーであったり逆の性別のメンバーである子どもと友だちになります。」という特徴を挙げています。

また、幼児期から学童期につながるジェンダー意識を、保育現場や学校、学童クラブでの丹念な調査の上で研究した『男子の権力』（片田孫 朝日 著 京都大学学術出版会 2014年）では、日常的に接する大人のジェンダー意識の影響に加え、集団の中で育まれるジェンダー意識によって「男らしい」「権力」を支える文化が生まれ、その結果、闘い遊びや粗暴なふざけなどの攻撃の文化、規則違反の腕白な行動が表れてくることが、説得力を持って語られています。

7. 幼児期の子どもとジェンダー意識

5歳児の「からだのはなし」の4番目のねらいは、子どもたちのジェンダー意識について考える、という内容です。小学校では3年生に位置づけている「男らしさ、女らしさ」のテーマを、幼児にどのような形で問いかけるのか考えた末、2年前の実践では、『こんなへんかな？（ジェンダーフリーの絵本1）』（村瀬幸浩 文 高橋由為子 絵 大月書店 2001年）p8-9「男の子用の服、女の子用の服ってあるの？」より、一つ一つの洋服、おもちゃを拡大して子どもたちに「着てみたい」と思うかどうか尋ねました。男児の服となっているものは男子も女子も手を挙げます。女兒の服とされるもののうち、大きなイチゴのアップリケがついた半ズボンも男子も多く手を挙げました。「ぼくはイチゴが好きだから」という声もあります。女兒のワンピース、ブラウス、水着は手を挙げる男子は数名。フリルたっぷりのドレスを出すと、両クラス共に女子たちから「きゃ〜」と声上がり、その後「きゃ〜かわいい〜」と続きます。男子からも「サクランボがかわいい！」という声。クラスによっては男子は手を挙げず、（見るのが）「恥ずかしかった」「手を挙げるのが恥ずかしかった」「男が着たら変だ！」という声も。

おもちゃでは、「使いたい」と思うかどうかを聞きました。トラック、汽車、飛行機は男子が多いのですが女子も1〜2名、熊のぬいぐるみは男女同じぐらい、大きな花がついたバッグは女子が多かったのですが男子も1〜2名手を挙げました。

年少の時、「ボクは男の子だ」と主張すると母親が悩んでいたのりこちゃんは、トラック、汽車、飛行機に勢いよく手を挙げました。ここでは自分が選んだもの、友だちが選んだものについて受け止めることを大切にしたいと考えました。ほとんどの子どもが「男なのに愛」「女ならこうだ」という受け止め方はしていませんが、一部の子どもの中に、はっきりしたジェンダーバイアスがかかっていることを感じる発言がありました。

まとめとして、女の子だから、男の子だからではなく、自分が好きだと思うものを選びたいね、と話しました。

生活の中で子どもが感じ取り、学び取っていることです。>

保護者には、「からだのはなし」を行う頃に、改めて幼児期の性と性教育について話をする保護者会を行います。保護者からは担任に子どもの家庭での様子がメールで届けられ、それを学級通信で紹介して交流することで子育ての中の性について考え合うことにつながっていきました。

6. 乳幼児期の子どもの発達とジェンダー

乳幼児期の子育て、保育を考える上でもう一つ押さえておかなければならないのは社会的、文化的につくられてきた性差であるジェンダーです。子どもたちは生まれた時から家庭（あるいはそれに代わる養育環境）という社会の中で育てられ、やがては保育園、幼稚園などの集団生活の中で、性にまつわるさまざまなことを刷り込まれていきます。男の子か女の子かということで身につけるもの、おもちゃなど親や周りの人たちが与えるものにもジェンダーが表れることが多く、子ども自身が選ぶ以前に“女の子らしい”もの、“男の子らしい”ものに囲まれて育つこともあるでしょう。そういう意味では、ジェンダー平等の意識が育まれるかどうかは育ちの中で周りの人たちがどのような意識を持っているかということによるものが大きいと言えます。子どもに関わる大人たち自身もまたそのようにして育てられてきたということを考えると、よほどの問題意識を持たない限り、「そういうものだ」と思い込んでこれまで生きてきた私たち大人のジェンダーに対する感覚を転換させることは難しいのではないのでしょうか。しかし、近年は多様性が叫ばれるようになり、ジェンダーに関わる意識も変化を見せつつあるように感じます。

一方で、幼児期から学童期の子どもたちにとって、自分は「女の子」であるか「男の子」であるかという認識は、アイデンティティ形成にとっても重要な部分でもあり、時には異性に対する嫌悪をあらわにすることもあります。

『ヨーロッパにおける性教育スタンダード』¹⁾では、性心理的発達を「子ども自身のニーズ／からだ／関係性／セクシュアリティ」の経験領域を踏まえて、0歳から始まる発達段階について①<発見と探求>の段階（0～1歳と2～3歳）、②<規則の学習、遊びと友だち関係>（4～6歳）、③<恥ずかしさと初恋>（7～9歳）、④<前思春期と思春期>（10～11歳と12～15歳）、⑤<おとな期への変わり目>（16～18歳）と5つに区分して示しています。ここでは紙幅の関係で詳しく述べることはできませんが、<規則の学習、遊びと友だち関係>の開始の時期とされる4～6歳の時期には、「自分が男子か女子であることを知り、いつもそうであろうとします。ジェンダー役割として『男の子が

1 『ヨーロッパにおける性教育スタンダード』：世界保健機構（WHO）ヨーロッパ事務所とドイツ連邦健康啓発センターが2010年に公表した性教育の指針。

と聞くと、「こちょこちょされる」「パパにぎゅーってされて、いやだと言ってもやめてくれない」「ママにぎゅーってされるんだよね。やめてって言うてもやめてくれない」という声が聞こえてきました。

子どもは心地よいふれあいは大好きです。そういうふれあいを通して親子の愛着関係も育まれていきますが、すべてのふれあいが心地いいわけではありません。自分の大好きな人とふれあうことはうれしいけれど、大好きな人であつてもうれしいときだけではないことに気がつくこと、そのことを言葉にして伝えることは、自分のからだは自分のものであるという感覚を育む上でもとても大切なことだと思っています。「プライベートゾーン」については、「水着で隠れるところ」ということでわかりやすいのですが、口、男の子の胸を含む「プライベートパーツ」という言葉のほうが正確であり、今年2021年度の「からだのはなし」では、「プライベートパーツ」として伝えました。そして、絵本『あっ！ そうなんだ！ わたしのからだ』（中野久恵・星野恵 文 勝部真規子 絵 エイデル研究所 2021年）の「プライベートパーツは自分だけが見たり触ったりしていいところ」というページを使い、自分のからだは自分だけの大切なものであるというイメージを持つようにしました。これは、たとえ親であつても断りなく触れないということを意識した表現であり、自分のからだを見たり触ったりすることは悪いことではないというメッセージを含んでいます。「いやだ」と感じたら「いやだ」と言っていことも子どもたちには伝えておきたいことです。

7) 保護者に伝える

和光幼稚園では日々の子もたちの姿を学級通信で伝えます。「からだのはなし」の内容を詳しく伝えたとき、担任は以下のようなメッセージを届けました。

<少し前の通信で、子どもの話を聴く……ということを書きましたが、これは子どもの心の内を聴くことでした。“からだ”のこと、“生活のこと”すべてに共通することだと、私は思っています。いきなり触られたり、いきなり取られたり、いきなり終わりにされたり、いきなりぎゅーっとされたり、いきなり脱がされたり、いきなり片付けられたり、いきなり怒鳴られたり……何かされるのは、誰だって「いや」なことです。相手に尋ねること、聴くこと、が互いの人権を大切にする関わりで、それは子どもでも家族でも同じだと、私は思います。誕生会の「怒ったこと」の話（誕生会では、これまででうれしかったことと共に、怒ったことも担任からインタビューしています）もそうですが、うれしい気持ちと同じくらいネガティブな気持ちを感じていることも大事。“からだの話”は、子どもがからだのことを考えるきっかけにはなりますが、この話を聞いてすべてがわかるわけではないと私は思っています。「いやだ」と思ったら「いやだ」と言っていことや「いやだ」と言われたらやめたり、相手の話を聴くことは理屈ではなく、日々の

「性器の形が違うので、男の子と女の子は別々に着替えているんだね。そして、同じ形の性器でも、一緒に着替えたくないこともあるんだね。自分のからだを見られたくないなあ、とか、見せたくないなあって思うことは大事なことなんだよ」と話し、その後、性器の形が違うのでおしこの仕方が違うこと、お風呂に入ったときの性器の洗い方についても絵本を使って伝えました。

5) もっと聞きたいこと、知りたいこと



1回目の最後に、「何か聞きたいことある？」と尋ねると何人かの手が上がります。「あのさあ、どうして男の子と女の子がいるの?」「どうしておちんちんとおまたが違うの?」「大人になると赤ちゃんが生まれてくるのはなんで?」「なんで男からは赤ちゃんは生まれないの?」……どれも子どもたちが日頃不思議に思っていることであり、

自分の存在に結びつく大切な疑問です。この後、担任に「聞きたいこと」を伝えた子どももいました。「男の子がお母さんに似ていて女の子がお父さんに似ているのはなんで?」「男と女は、おっぱいが違うの?」など追加の質問でした。

なんで? と聞かれてもすぐには答えられないこともあり、説明しても子どもには理解するのが難しいこともあるでしょうが、子どもが「なんで?」と言ったことがタブー視されず、大人がしっかり受け止めることは、大人への信頼感を育む上でもとても大切なことだと思っています。子どもは生物学的に正確な情報を知りたいというより、からだ、いのちにまつわることを自分なりに納得したい、という思いなのかもしれません。

2回目の「からだのはなし」の最初には、出された疑問にわかりやすく答えたつもりですが、納得できたのかどうか……。でも、女の人には赤ちゃんのいのちの素があり、男の人もしのちの素を持っていて、男の人のいのちの素を女の人のいのちの素に送り届けることができるように、性器の形が違っているということを、とても真剣に聞いていました。

6) ふれあうことの心地よさと「いやなタッチ」

2回目は誰かのからだどふれあうとき、「うれしいタッチ」と「いやなタッチ」があること、そして、プライベートゾーン／パーツも含め、自分のからだ全体が大切なもので、他の人が「いやなタッチ」をしようとしたときに「いやだ」「やめて」と言っている、という内容で話を進めました。「友だちと手をつないだり、お母さんやお父さんに抱っこしてもらってうれしいときもあるし、ちょっといやだな、っていう気持ちのときもあるよね。そういうときに、いやだな、って思うことも大事なことです。そういうことある?」

私が「ということは、男の子どうしだからいいよ～じゃなくて、他の男の子でも、一緒に着替えるの、ちょっと恥ずかしいなあ、って思う？」と聞くと、てつくんは大きくなるはずでした。「こういうの、わかる？」と子どもたちに聞くと、子どもたちは「わかる！」と言います。私は「そうだよ、男の子どうしでもちょっと恥ずかしいなあって思う人もいるよね」と話しました。その後、てつくんは着替えのときは面談などに使う小部屋を使い、1年生になった今でも着替えは一人になることができる場所で行い、他の子どもたちもてつくんのことはよく理解しています。

4) 女の子と男の子は「性器」の形が違う

この日は続いて「男の子と女の子って何が違うの？」と問いかけました。「は～い！あのさあ、男の子は、おまたがさあ。ちょっとびよ～んって伸びてて、女の子は普通にさあ、……伸びてない」と、ひかりちゃん。とあちゃんは「おまた見られると恥ずかしい」と言います。「は～い」「はい」「はい」と言いたい人がたくさん。私が「そうか、パンツをはいて隠してる、そこが違うのね」と言うと、「違う！男は赤ちゃんが生まれないけど女は赤ちゃんが生まれる」と、たくみくん。「そこも違うよね。みんなのからだで違うところは？」と聞くと、「おちんちん」という声。ここで“お客さん”の登場です。例のオーストラリアの赤ちゃん人形を並べ、「このお人形、一人が男の子で一人が女の子」と言うと、「どっちが女の子かわからない」と子どもたち。「このままじゃわからないね」と言ったのですが、「わかった！服の色！」「顔がちょっと違う」などと言います。結局決め手はなく、「このままじゃわからないでしょ。どうやったらわかるかという……」と声をかけますが、この時の子どもたちからは、服を脱がして性器の違いを確かめるといふ発想は出てきませんでした。考えてみると日本の人形には性器がついていないので当然かもしれません。私がお人形に丁寧に声をかけ、産着を取りおむつも外すと、男の子、女の子の性器がわかり、見分けがつかしました。

「この男の子と女の子の違うところは、なんて言うのかな？」と尋ねると、男の子には「ちんちん」、女の子には「おまた」と答えます。ここでもたくみくんは「男は赤ちゃんを産まなくて女は赤ちゃんを産むんだよ」と言います。「女の人は赤ちゃんを産むから男の人とからだが違うのね」と話した後、「もう年長になっているから大人の人でも使える言葉を教えてあげるね。おちんちんも間違いじゃないんだよ。でも大人になってもずっと使える言葉は、性器って言います。男の子の性器、女の子の性器です」と伝えました。「せいき」とつぶやく子どもたち。

性器の呼び名については、ペニス、ワギナと伝えることもありますし、この言葉でなければいけない、ということが決まっているわけではありませんが、大切なのは、名前があるということがわかることと、子ども自身が名前を言えることだと思っています。

田上時子 翻訳 NPO法人女性と子どものエンパワメント関西 (2017年復刊) を拡大したものを読み、いやなふれあいには「いやだ、やめて!」と言っていいと子どもたちに伝えます。



3) 自分のからだを見られるのは恥ずかしい (2020年度の実践より)

休園が長く続いた2020年度、分散登園から少しずつ幼稚園生活を再開した日々で、例年のように宿泊をしてお泊りするのはできませんでしたが、「からだのはなし」を2回行いました。感染対策を十分にしながらプールにも入り始めていた7月中旬、1回目の「からだのはなし」は、着替えの場所から話を始めました。私が「プールに入るときはどこで着替えるの?」と尋ねると、保育室で、と答え、「女の子と男の子が分かれて」と、みなちゃん(仮名、以下同じ)が言います。あきおくんは「壁を作って」と、いつも「密」を避けるため開け放っている2クラスの保育室の間にパーテーションを引っ張ってきて「壁」にすることを説明してくれました。私が「いつもは壁があるの?」と聞くと「ないよ〜」という子どもたち。「着替えるときじゃないと壁はないんだ」と私が言うと、はるちゃんが「えっと、恥ずかしくなるといけないから、だから壁を作ってる」と言います。着替えるときに分かれることについて口々に話し始める子どもたち。「女の子と男の子とで分かれて着替えるのは、一緒になると恥ずかしいからなの?」と私が聞くと、少し考え込む子どももいました。一緒だと恥ずかしいかどうか聞くと、恥ずかしい、と言う人、恥ずかしくないよ、と言う人、どちらにも手が上がります。「恥ずかしくない人もいるんだね。でもなんで分かれているのかなって言うと恥ずかしいからって言うけど、なんで恥ずかしいのかな?」と聞いてみました。「だって、裸になるから」「お腹が見える〜」「裸になるも〜ん」「みんないるから〜」などと口々にしゃべり始めます。「誰か、なんで恥ずかしいか言ってくれる?」と聞くと、「は〜い。全員だとさあ、すごい恥ずかしい」と、ひかりちゃん。「全員だと恥ずかしい?なんで恥ずかしいの?」とさらに聞くと「パンツいっちょとかなるし」という声。ゆうちゃんは「あのね〜。おまたとか見られると恥ずかしいから」と言います。けいとくんは「裸になるから恥ずかしい」、はるくんは「裸んぼうだと、エッチ……」などと続きます。私が「女の子たちはお友だちに見られても大丈夫?」と聞くと、「だってみんな女の子だし」という声。「あ、みんな女の子だったらいいんだ。男の子は?」に、子どもたちは「うん」「大丈夫」と答えます。「それ、どうして?」と聞くと、「あの、男の子どうしだとい」と、ひかりちゃん。「女の子どうしでもいい」「大丈夫」「男どうしなら平気〜」などと話しますが、てつくんが「あの〜」と手を挙げました。「てつはあ、どっちも恥ずかしい。男の子と男の子でも」。

- ② 男の子と女の子は、性器の形が違うので、おしっこの仕方が違うことがわかる。また、からだを清潔にすることが大切であることがわかり、性器の洗い方がわかる。
- ③ “プライベートゾーン／パーツ”を理解し、性器・排泄器、お尻・肛門、胸、口などだけでなく、からだ全体が他の人に勝手に触らせてはいけないことがわかる。
- ④ 女の子と男の子の違いは、性器だけで、あとはほとんど違いがないことがわかる。

2) 「からだのはなし」 展開と子どもたちの反応

例年は<ねらい>の①、②、③をそれぞれ6月に1回ずつ、ジェンダーに関わる④は2学期に行っています。

1回目は子どもたちの中の誰かの赤ちゃんの時の写真を借り、5歳になった今と比べて成長したことを確かめるところから始めます。ほんの5年前のことではありますが、立つことも言葉を話すこともできなかった頃からめざましい成長をしてきたことが子どもたち自身にもわかります。最後に絵本『からだっていいな』（山本直英・片山健 作 童心社 1997年）を読みます。

2回目は、まず2体のオーストラリアの赤ちゃん人形に登場してもらいます。日本の人形には性器がありませんが、欧米の人形には女兒、男児の性器がきちんとついています。オーストラリアの人形は白人とアボリジニの2種類があるということでしたが、私が知人を通じて注文したのはアボリジニの人形。肌の色が浅黒く、子どもたちにはそこでも多様性を意識してもらいたいと思ったからです。その2体の人形には新生児用のおむつと産着を着せていますが、「からだのことを知るために脱いでもらってもいいですか？」と声をかけてから産着を取り、おむつを外します。そこから女の子と男の子の性器の違いを知り、性器の呼び名を知るという展開です。また、性器の形が違うのでおしっこの仕方、お風呂での洗い方も違うことを絵本『あっ！ そうなんだ！ 性と生』（浅井春夫・安達優雅子・北山ひと美・中野久恵・星野恵 編著 勝部真規子 絵 エイデル研究所 2014年）の拡大したページを使って伝えます。



3回目は抱っこされたりおんぶされることを思い出し、その時の感覚、うれしかった、気持ちよかったなどを言葉にして交流します。人と人がふれあうことはとても心地いいことだ、ということ、まず子どもたちと確かめ、その上で、自分をよくても相手がいやだと思ふことがあるということにも気がつくようなやりとりをします。そして、水着で隠れるところをプライベートゾーン／パーツと呼んで、他の人が断りなく見たり、見せたり触ったり触らせられたりしてはいけないところ、ということを伝えます。ここでも最後に絵本『わたしのからだよ！』（ロリー・フリーマン 作 キャロル・ディーチ 絵

育課程の中に性教育を位置づけなければという問題意識を持つようになったとも言えます。幼稚園では3歳児の保護者に、「幼児期にこそ育みたいからだ観」と題して話をしています。保護者自身も性教育をきちんと受けた経験がないという方も多く、子育ての中で出会う性の問題にどう向き合っていけばいいかという悩みもありますので、真剣に向き合ってくれます。

一方、幼稚園でこれまでずっと行われてきた「男女共に水着は海水パンツ」ということについて保護者の方から疑問を投げかけられるようになり、職員会議での議論を経て女の子はワンピース型の水着に変更し、その後男の子もラッシュガードを着ることを勧めるようになりました。保育者たちに幼児期の性についての問題意識を投げかける中で、5歳児は水着に着替えるときタオルで隠して恥ずかしそうにしているということに気がつき、男女で着替え場所を分けるようになりました。これは4歳児でも同じで、4歳児も着替えは別室にします。3歳児の担任からは、水着に着替える場所が通りかかった人から見える場所でいいのか、ということが問題提起されるようになり、これまで幼児だからこれでいいと思って行ってきたことを、子ども一人ひとりのからだを大切にするとする視点で考え直すきっかけになりました。

5. 5歳児と考える「からだのはなし」

1) 「からだのはなし」ポイントとねらい

5歳児の子どもたちに「からだのはなし」をするようになって6年目となります。幼児の生活の中では排泄や入浴など日常的に自分のからだ向き合うことが多く、また自分のからだと他の人のからだの違いなどにも興味を示す時期でもあり、2泊3日の合宿を控えた時期に集団で学ぶ時間を取るようになりました。

「からだのはなし」をするときのポイントになることは以下の6点だと考えています。

- ① 性器の名称がわかり、プライベートパーツを理解する。
- ② 「うれしいタッチ」と「いやなタッチ」の違いがわかる。
- ③ 女の子と男の子の違いは、性器だけで、あとはほとんど違いがないことがわかる。
- ④ 絵本や人形など、子どもたちがわかりやすい教具を準備する。
- ⑤ 一人ひとりの受け止め方、感じ方を大切にする。
- ⑥ 学習したことを保護者にも知ってもらい、家庭でも「からだ観」を育むことを大切にしよう働きかける。

そして、〈ねらい〉は以下の4点としています。

- ① 自分のからだはさまざまなことができること、からだ心地いいという感覚を肯定し、自分のからだの主人公になることができる。

ン)という言葉はここ数年で急速に広がってきたように思います。性的マイノリティーといわれる人たちは、ある調査によると7.6%、つまり35人の教室に2人から3人はいてもおかしくないと言われていますが、そもそも性は多様であり私たち自身がその多様な性の中にいるのだという捉え方をしておきたいと思います。その上で、自分のからだの性別に違和感を持つ人たちの多くは、幼児期から性別違和を感じているということも、保育に携わる者としてはわかっておく必要があります。私が勤務する幼稚園でも、わが子が性別違和を感じているのではないかと保護者からたまに相談を受けることがあります。“女の子”の母親からは「自分のことをボクと言いたがる」「女の子っばいおもちゃで遊びたがらない」という悩み、“男の子”の母親からは「スカートをはきたがる」「ピアノの発表会の衣装をドレスにしてほしいと言って聞かない」という悩み、などです。これだけですぐにトランスジェンダーであると決めつけることはできず、成長とともに変化することも伝えながら、その子が望むことに応えようとしている親の姿勢には大いに共感しました。性は多様であり、自分らしく生きていくことができることが大切であるというメッセージは、子どもたちには伝えたいものです。

4. 保育現場、学校現場で見直したこと

私は大学を卒業後すぐ、現在勤務している学園に幼稚園の教員として赴任しました。当時プールに入るときの水着は男女とも海水パンツとしており、着脱のしやすさとともに「からだに太陽をたくさん浴びるため」と説明されていました。もう40年以上前のことです。当時から5歳児は合宿に行っていましたが、入浴は男女一緒に、班担当の教員も裸になって入っていました。新任の頃で、特に疑問も持たなかったのですが、数年後、同じ学園の小学校教員として低学年の合宿で同じように入浴を行ったとき、子どもたちから「先生も一緒に入るの?」と怪訝な顔をされたことがありました。男女一緒に入ることにも一瞬ためらう子どもたちの姿があり、私自身が性教育との出会いの中で、「からだ観」を育むということと、授業、保育の中で何を語っていくのか、子どもたちの生活の中で何を大切にしなければならないのかを考えるきっかけになった出来事でした。

30年以上、小学校で担任教師として子どもたちと向き合いながら、「こことからだの学習」を教育課程の中に位置づけ、1年生から6年生までのカリキュラム作りを行いました。管理職になってからは、幼稚園、小学校の子どもたちの性の学びを保障するために保育者たち、教員たちと学びを進めています。

一方で小学校の保護者たちの性教育に対する要求は以前から多く、年に1度開かれる学校全体での教育懇話会（父母と教師の懇談会）には毎年必ず性教育の分科会が設けられています。子どもと性の問題はかなり以前から切実な問題として保護者の意識の中にあつたのです。保護者たちの願いと子どもたちの実態に後押しされる形で、私たちも教

そして、幼児期に欠かしてはならない学びとして、以下の6点を意識しておきたいと思います。

- ① 性器を含む、からだの部位の名前を知ること。これは入浴がチャンスです。
- ② 口、胸、性器、お尻はプライベートパーツであること。
- ③ プライベートパーツは、自分だけが見たり、触ったりしていい場所であること。
- ④ 排泄の仕方。女の子と男の子は性器の形が違うので排泄の仕方も違うこと。
- ⑤ プライベートパーツの洗い方。これは排泄の自立ができるようになった頃から。
- ⑥ からだを守るための具体的な方法として、いやだと感じたら、「イヤ」と言っていていい、いやなタッチだと感じたらすぐ離れていい、いやなことが起きたら大人に話すということ伝えること。その時大人は「よく話してくれたね」と受け止めることが大切です。

3. からだを肯定的に受け止めること

幼児期の子どもたちに自己肯定感を育て、自分も周りの人も大切な存在であるということを感じる子育て、保育を行うことは、その後の生き方を左右することにつながると考えています。私が勤務する幼稚園では、年長の子どもたちにプールが始まる頃、「からだのはなし」を3回に分けて行っています。子どもたちには自分のからだを肯定的に受け止めてもらいたいと願っており、そのためには、自分のからだは自分のものであるという感覚を持つことは欠かせないことです。子どもたちは自分のいのちの成り立ち、どこからどうやって生まれてきたのかを知りたいと思いますが、誕生について正確に知るには性器の名称を知る必要があります。外性器は排泄、入浴など日常的な存在であり正確な名称を学ぶことはこれから先の性器感（観）をどのように育むかということとも関わってきます。名前がある、ということはそのものの存在を認識するということです。歴史的に見ても女性の性器の名称は俗語であったり、「性交」を意味する隠語で語られたりしており、きちんと認識されてこなかったのではないのでしょうか。日本に限らず世界各地でも同じ現象が見られます。このことは、女性の性器は女性のものでなかったということの意味しています。男性器、女性器共にきちんとした名称を言えることはその存在を他のからだの部位と同じように自分のからだの一部として大切に扱うことにつながります。性器に対して肯定的な感覚を育むことで、「性器タッチ」に対しても肯定的に受け止められるようになるでしょう。少し前まで“性器いじり”と表現されることもありましたが、自分のからだを自分で触ることは否定されることではないため、「いじる」という表現はふさわしくないのではないかと考えます。

また、性の多様性についても幼児期から認識しておくことが大切なことだと思っています。LGBTQ（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、クエスチョ

ないかと思っています。

1つ目は、子どもが発信するあらゆることを受け止め、適切に対応する、ということです。子どもたちは親や保育者、友だちなど多くの人との関係の中で育っていきます。特に乳幼児期にはからだとからだのふれあいの中で生まれる感覚が多いのですが、大人は、子どもがふれあって感じた気持ちを受け止めることが大切です。そして、“快”を感じる力を育むために、気持ちのいい体験をたくさんさせてあげること、その時共感の声をかけをすることで、“気持ちがいい”という感覚がわかるようになります。暑い日に冷たい水で顔を洗って「気持ちいいね！」と声をかける、おむつを替えたときに「気持ちよかったね」と声をかける、などなどです。まだ子どもが自分ではできないことには必要なケアをすることも欠かせません。また、いやだと感じたら「イヤ」と言っていることを伝えることも大切なことです。いやだな、と感じることがあってもそれを言葉にして伝えられないこともあります。しかし、「イヤ」ということを伝えてもいい、というメッセージは、子どもが自分自身を守る上でとても重要なことです。

そして、子どものなぜ？には、うそやごまかしではなく答えること。前述した「自分はどこから生まれてきたの？」「自分のいのちの素はどうやってできたの？」と問われたとき、さすがに今の時代「橋の下で拾ってきた」「コウノトリが運んできた」と言ってしまう人はいないのではないかと思います。とっさのことに答えられずごまかしてしまう、話をそらしてしまう、「そんなこと知らなくてもいい」と言ってしまう、ということはあるのではないのでしょうか？なぜそう思うのかを確かめることで、子どもが本当に知りたいことは何かがわかります。すぐに説明できないなら「あとでちゃんと話すね」と言って、改めて向き合って話をするのが大切です。子どもがいのちに関わることを親に聞いてくるというのは、自分自身の存在そのものを確かめたいという思いと、親子の絆を確かめることで安心感を得たいというのが本当の気持ちではないかと思っています。それをはぐらかしたりごまかしたりすると、この人は自分が聞きたいことにきちんと向き合ってくれないという受け止めをすることになるでしょう。それは今後の親子の関係に影響を及ぼすことになりかねません。だから大人がしっかり学んで正しいことを年齢に応じた言葉で伝える必要があります。

2つ目は、子どもが「からだっていいな」を実感できるような関わりと学びを保障する、ということです。排泄ひとつをとっても、一人で便座に座ることができるようになった、お尻を拭くことができるようになった、と“できるようになった”ことは子ども自身の喜びでもあります。お箸を使えるようになった、シャワーを頭から浴びることができるようになった、などなど、乳幼児期の子どもたちの成長を親も保育者も実感する日々ではありますが、できるようになったことに気づかせ、認め、声をかけることで、子ども自身がそのことを実感し、それが自己肯定感につながっていきます。

からだのはなし ～ 乳幼児期の性教育を考える ～

北山 ひと美*

Sex education for young children to perceive their bodies positively and protect
their bodies as well as the bodies of others
～ Essential sexual learning in infancy ～

Hitomi KITAYAMA

1. 子育てと性

「お風呂と一緒に入るのは何歳まででしょうか?」「うちはお風呂上がりには裸で過ごすのですが、いいのでしょうか?」「子どもと一緒にお風呂に入っているときに月経血が……なんと説明すればいいのでしょうか?」小学生の保護者と性教育の話をする、よく出る質問です。

幼稚園の保護者会では、「性教育はいつから始めればいいのでしょうか?」ということもよく聞かれます。子育てをしているとこのような疑問にぶつかることがあるのではないのでしょうか。

子どもの誕生にまつわって、名前、産着の色、おむつの当て方など「男の子か女の子か」で考え、誕生のその瞬間から、意識するかしないかにかかわらず、子育ての中で性に関わることは切り離すことはできません。つまり誕生とともに「性教育」は始まっていると言えます。

幼児期になり自分と周りの人の存在に気づくようになると、お腹に赤ちゃんがいる女性を見て赤ちゃんはお腹の中からどうやって出てくるのだろうという疑問を持ちます。と同時に、自分自身も母親のお腹の中から生まれてきたことに気づき、「どこから生まれてきたの?」ということを知りたくなり、さらに自分のいのちの素はどうやってできたのだろう、ということにも疑問を持ち始めます。たいていの子どもは一度はその疑問を母親にぶつけるのではないのでしょうか。いきなり尋ねられた大人は、どのように対応すればいいでしょう。幼稚園の保護者と話していると性にまつわる困りごととして相談されることのひとつでもあります。

2. 子どもたちと関わるすべての大人の心得として

子どもたちと関わるすべての大人は、2つのことを心得ていなければならないのでは

* (きたやまひとみ) 和光小学校・和光幼稚園 校長

『幼児の教育』 令和3年 総目録

◇春号

創刊120周年を記念して 浜口順子
創刊120周年記念

『幼児の教育』1200年。未来に何を
つなぐのか1
保育史と出会う奇跡―『幼児の教育』
のバックナンバーを検索したら驚いた

・座談会2021
浜口順子・久保健太・
宮里眺美・阿部祐美子

保育をつなぐお茶の水女子大学附属
幼稚園からの発信 vol.10
附属幼稚園と大学・研究・教育のバ
ーナーとして― 小玉亮子
「育ての心」で語りあう―動画を囲んだ
DX時代のカンファレンス vol.1
子どもに任せて「場所」になる

鈴木秀弘・池永憲彦・
久保健太
からだの対話とからだ育て
初めての海外生活の地ミャンマーの教
育環境 芳賀啓介
A児の表したものの表現の指導につい
て考える 杉浦真紀子
大人が読みたい絵本―かかわり合いの
知恵を求めて 菊地知子
鎌倉おもちゃ屋物語その9 黒須和清

言語景観からみる子どもの言葉の発達
を促す教育環境―フィンランドの幼
児教育現場からの示唆― 矢田明恵

◇夏号

今、大切にしたいことを思う
上坂元絵里
創刊120周年記念

『幼児の教育』1200年。未来に何を
つなぐのか2
「おもちゃ」って何？―おもちゃを
つくる人たちと考えてみた

・座談会2021
丸山素直・宮里眺美・私市和子・
花牟禮瑠美子・柳奏子・浜口順子
・「平和のための教育」 津守真
(1988年) から

私の保育ノート 心躍る時間―「水」
と一緒に― 松田千嘉子
保育をつなぐ vol.10 歴史資料から
―時を超えてつながる― 吉岡晶子
「育ての心」で語りあう vol.2
コミュニケーションと心地よさ(上)

溝口義朗・平賀努・中村則仁・
野村幸子・久保健太
承認不安時代の子育て
ブータンの保育園事情とタイでの子育
てエピソード 太田幸輔
鎌倉おもちゃ屋物語その10 黒須和清

子どもは生活世界の現象学的探究
―ユトレヒト学派臨床的教育学の意味
義に関する一考察― 浜口順子

◇秋号

暮らしの彩り―祭りの記憶 宮里眺美
創刊120周年記念

『幼児の教育』1200年。未来に何を
つなぐのか3
子どもの暮らしと行事―祭りに着目
して

・座談会2021
松延毅・西野博之・
加藤理・菊地知子
・「小鳥の死」または「園行事」の
こと 間藤脩
(1983年) から

私の保育ノート 子どもは世界と出会
い、生きることを感じている
関山隆一
保育をつなぐ vol.11 保育者としての歩
みを振り返る 伊集院理子
「育ての心」で語りあう vol.3
コミュニケーションと心地よさ(下)

溝口義朗・平賀努・中村則仁・
野村幸子・久保健太
行事を楽しみましょう―季節とともに
・自然とともに― すとうあさえ
チャレンジスクールの日々―子ども
の発達と保育―の授業を通して

片岡知子
鎌倉おもちゃ屋物語その11 黒須和清
乳幼児の学びの理論としてのドゥル
ズ／ガタリ理論 久保健太

◇冬号

歩く・探す・出会う・驚く・また歩く
菊地知子
創刊120周年記念

『幼児の教育』1200年。未来に何を
つなぐのか4
散歩の意味をとらえ直そう―戸外の
保育が学びをひらく

・座談会2021
久保健太・坂本喜一郎・
野村直子・宮里眺美
私の保育ノート つながっていくそれ
ぞれの「思い」 平野亜季
保育をつなぐ vol.12 海外とのつながり
上坂元絵里

「育ての心」で語りあう vol.4
子どものアンテナに大人が気づく
市川杏子・井口陽南子・
能登比呂志・伊垣尚人・久保健太
お散歩を通じてまちで育てる―「まち保
育」の視座 三輪律江
ドイツの自然で育まれる心 野原咲子
鎌倉おもちゃ屋物語その12 黒須和清

からだのはなし―乳幼児期の性教育を
考える― 北山ひと美

『幼児の教育』 令和3年 総目録

子ども学の

ひろば

お便り

POST

◆私の「カルチャー・いんふお」◆

「女優たちの終わらない夏・終われない夏」(NHK BS1 スパッと! 2021年夏再放送)から。

高田敏江、日色ともゑ、渡辺美佐子、山口果林ら十数人は戦争の記憶を風化させまいと「夏の会」を結成し、2008年から12年間にわたり朗読劇「夏の雲は忘れない」を聴かせてきました。劇は広島・長崎で被爆した子どもや母親の手記を元に毎年構成され、女優たちはすべて手弁当で毎夏の公演を運営しました。最後となった2019年も全国で29公演を開催し多くの聴衆を集め、戦後生まれの若い演出家、城田美紀は体験したことのない「被爆する」夢を見るほどでした。子どもであった戦争時代に「航空機燃料にするため松の木の樹脂を集めた」という川口敦子。当時東京で心を寄せた龍男君が疎開先の広島で被爆したと30年後に知り、渡辺が集め始めた子どもたちの言葉、「お母ちゃんの骨は口に入れるとさみしい味がする」。番組は女優たちの語りを織り交ぜながら、子どもや学生も朗読に参加し、会の活動の原点である「平和の願いを次の世代へバトンタッチ」する様子を描きます。「よなかにおとうちゃんが、いもをくたいといいました。おばあちゃんは、はいといって、いもをにました。『おとうちゃん、いもができました』といっておとうちゃんをみると、もうこえができません。ぼくがおとうちゃんからだにさわってみると、つめたくなって、もうしんでいました。おとうちゃん、おかあちゃん、さようなら。」佐藤朋之作(当時4歳、小学4年)。渡辺は読み手である現代の少年に語ります。佐藤君はおとうちゃんの「いもをくたい」の言葉を聞いて、もしかしてお父さんが元気になってきたかもしれないと思っていただろうと。参考:『夏の雲は忘れない』(夏の会編 2020年 大月書店) (AK)

◆研究論文を募集します◆

ピアレビュー(査読)の上、掲載します。

本誌の巻末、横書き部分の「探究」ページに掲載する論文を募集します。

【テーマ】子ども、保育、幼児教育に関するもの

【文字数等】12,500~13,000字程度(日本語)。

(写真・図表、文献、注を含む)

本文はワード原稿で作成してください。編集上適宜対応しますが、投稿予定の方は下記のアドレスまでメールでご相談ください。

【締め切り】随時募集します。

【送付先】本誌編集委員会

Mail : youji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jp

◆年間購読継続手続きのお願い◆

いつもご愛読くださり、ありがとうございます。

次号春号からの年間購読を引き続きご希望の方は、更新手続きが必要となります。フレール館のホームページに入り、オンラインショップ「つばめのおうち」のバナーをクリック。その後、「定期購読」⇒「幼児の教育」の表紙絵をクリックします。

定期購読のサイクルは冬号で一区切りになります。ご不明の点などございましたら、youji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jp までお問い合わせください。

おかげさまで今年も無事に4号をお届けすることができました。今後ともどうぞお引き立てくださいますようお願い申し上げます。

(編集委員会)



編集後記

2021年夏、東京2020オリンピック・パラリンピックが無事に開催され大きな感動を呼びました。コロナ禍の中での開催への感謝を示しつつ、目を輝かせて競技に取り組む選手たちの姿からは、明日へ明日へと前進し続ける勢いがみなぎり、見ている私たちに大きな勇気を与えてくれたように思います。

『幼児の教育』も前進を続けています。2021年春号から表紙を一新し、内容もさらに充実したものへと転換しました。2次元コードを載せて実際の映像を視聴できるようにしたのも新しい企画です。かつて倉橋惣三がそうであったように、私たちは常に新しい可能性へ向かって心を開き、取り組んでいきたいと思っています。

冬号の座談会は引き続きリモート開催でした。「散歩」「自然とのかかわり」をテーマに語りあいましたが、座談会が終わった後に「いつか園に遊びに来てください」という呼びかけがあり、一同大いに盛り上がりました。私も座談会に参加していましたが、画面で見た魅力的な場所にいつか必ず行く！と心に誓ったのでした。

2021年が終わり、いよいよ2022年です。秋から冬へ、そして春へと季節は確実に移り変わっていきます。季節の移ろいに歩調を合わせながら、コロナの状況が次第に落ち着き、「以前の暮らし」が少しずつ戻ってきていますようにと願いながら、日々を過ごしていきたいと思っています。(MA)

次号予告 幼児の教育 春号 2022年4月刊行予定

創刊121年。歴史を生かし「今」の保育をどうするか。

- ◇ 倉橋惣三生誕140周年記念特集 1
座談会 「人間・倉橋惣三を想う」
倉橋和雄氏、倉橋耀子氏、倉橋麻生氏 ほか
- ◇ 新企画 「パパ・じいじ・ばあばの子育て日記」 池永憲彦氏
- ◇ 論考 「僕の中の文化」 浦中こういち氏（絵本作家） ※タイトル・内容が変更になる場合もあります。

幼児の教育 冬号 第121巻 第1号

令和4年1月1日発行
 編集発行人／浜口順子
 編集担当／田中恭子
 発行所／お茶の水女子大学
 『幼児の教育』編集委員会
 〒112-8610
 東京都文京区大塚2-1-1
 お茶の水女子大学
 浜口順子研究室内
 youji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jp

発売所／株式会社フレーベル館
 電話：03-5395-6604（編集）
 振替／00190-2-19640
 印刷所／図書印刷株式会社
 定価／968円（本体880円＋税）
 ◎お茶の水女子大学『幼児の教育』編集委員会
 2022 Printed in Japan 無断転載禁止
 落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

編集委員／菊地知子
 久保健太
 高橋陽子
 松島のり子
 宮里咲美
 お茶大3園合同研究会
 （附属幼稚園、
 いずみナーサリー、
 文京区立お茶大こども園）
 編集協力／フレーベル館

●ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613（営業）●

